

読書編

比較的、本は読んだ方だと思っが、何かの役に立てようと思って読むことは少なく、読書を楽しむ方だったので、はなかるうか。乱読と言っ言葉がピッタリする。従っ、ノウハウものは殆んど読んだことがない。読後感を幾つか紹介してみたい。

「二十世紀図書館」

文芸春秋平成十年八月号に「二十世紀図書館」と称して、二十世紀に書かれた本の中から「私の一〇冊」を選ぶアンケートを行い、政界・財界・官界・文化人から一七〇通の回答を得て、これを纏めた記録が発表されました。どんな人がどんな本に興味を持つ

ているのか、を知るのも面白いし、どんな本が広く認知されているのか、を知るのも面白かった。選ばれた知名人達が好む本には、日本の本、海外の本を問わず、割と思索的なものも多く、私が選んで見たものとは大分かけ離れていました。どうやら私が若い頃、あまり思索的な生活を送っていなかった所為ではないかと思えます。日本の本のトップに「坂の上の雲」が来たのは、妥当な選択とも思いましたが、外国の本のトップにケインズの「一般理論」が来たのには驚きました。経済学の分野では画期的な本であったには違いありませんが、全部門を通してのトップに来る本なのだろうか。偉い人たちも恰好をつけた部分があつたのではないか、なんて下司の勘繰りをしました。

私も考えて見ました。考えてみると中々難しい。接した順（と思われる順）に列記してみます。判定の基準は「機会があつたら読み返して見たい度」の強い本、と言うことになるのでしょうか。

アレクサンドル・デュマ「モンテクリスト伯」。最初は小さい頃、講談社の単行本で「岩窟王」として読んだものです。その時は単に面白い、と思って読んだのだと思いますが、長じて全文を（勿論、原書ではなく翻訳文ですが）読むと、より深いものがあって、良く出来たストーリーだと思います。何度か読み返しましたが、新たな発見もあって、飽きずに読めます。「モンテクリスト伯」にはファンが多くて、世界規模でマニアックのクラブみたいなものがあると聞いたことがあります。当時、講談社の単行本で読んだのは、「宝島」とか、「ロビンソン・クルーソー」「小公子」「若草物語」「ガリバー旅行記」⁵「ホメロス物語」「ドンキホーテ」などがありました。いずれも子供向けにアレンジしたものでしたから、大きくなってから全容を読むと、全く違った理解とか解釈が出来て面白いのです。良い入門書を与えて貰っていたんだな、と思います。

ロジェ・マルタン・デュ・ガール「チボー家の人々」。これはご存じの通り、超大作です。高校の頃、期末試験の期間中に図書館でこの本に出くわし、読み出したら止まらなくなつて、試験もそつちのけで読みました。その時の試験の成績がどうだったか覚えて

いませんが、毎晩、明日の試験の準備に掛らねば、と思いながら、もう少し、もう少しと読み進んで行ったのに違いありません。後で、続編の「チボー家のジャック」なんて本も読んだ記憶がありますが、もう一度読み返してみたいのは「人々」の方です。これは知名人の中でも人気があるようで、海外の本の部で十四位に入っています。

五味川純平「人間の条件」。アンドレ・マルローや森村誠一にも同名の著書がありますが、私のは戦争の悲惨さを描いた五巻もの。これは仲代達矢(だったと思う)主演の映画を先に見て、映画に感動して後で本を読んだのではなかったか、と思います。いずれにしても迫力のある物語でした。故岡崎に会った時、本の中の悪役「現場の岡崎」のイメージと比較した記憶がありますから、あの頃読んだのに違いありません。戦争もの関連では、阿川弘之の「暗い波濤」も忘れることが出来ないものです。これは私がロンドンにいた頃、玉川兄が持って来てくれたもの。「暗い波濤」は、図書館の方でも数人の人が選んでいました。阿川弘之では「米内光政」「山本五十六」「井上成美」の大将三部作も良かったし、海軍ものと言う事になると江藤淳著の山本権兵衛の伝記「海は蘇

る」も上げたいものです。

司馬遼太郎「竜馬が行く」。図書館の中では、司馬作品のトップは「坂の上の雲」で、「竜馬」は四人が選んで四十八位と言つことになっています。司馬遼太郎のものとはどれも面白くて、どれが上位に来てもおかしくないと思つていますが、私が選ぶとすれば、「竜馬」に止めを刺します。故岡崎に借りて読んだのが最初でしたが、勿論自分でも買って何度か読み返しましたし、司馬ファンになって、司馬さんの本を殆んど読むキツカケを作つてくれたのがこの本です。これを契機に明治維新もずい分読みましたが、明治7維新の関連では、子母沢寛の「勝海舟」も捨て難い。

五木寛之「青春の門」。五木寛之の本も好きなのが多いのですが、原点はこの本にあるのではないかと思います。筑豊の炭鉱町に育つた信介と幼友達の織江を巡る話で、二人の成長に従つて、大河みたいの流れているドラマです。まだ完結していないのはないかと思いますが、どこまで進んだのか、が確認出来ないと言つのは、最近私がサボっていると云つことなのでしょう。人の成長に従つて話が進んで行く物語で、同じ手

法を取っているのが、テレビの「北の国から」です。これも私の大好きな番組で、テレビの世界で好きな番組のベストテンを選ぶ機会があったら、これをトップにするでしょう。流石に、この種の大衆文学に近いものは、図書館の中には登場してきません。村上春樹や村上龍、果ては内田春菊なんかを上げている人もいるので、五木寛之は、これらの人たちと比較しても全く遜色のない良い作家だと思っし、面白い本だと思っただけど・。いつだったか、五木寛之と大藪春彦を同じジャンルに入れて、並べて比較しているのを見て、比較することすら失礼だ、と腹が立ったことがあります。大衆文学に入れるには失礼なのでしょうが、夏目漱石は相変らずの人氣で「我輩は猫である」「坊ちゃん」「心」なんか選ばれていました。私は「虞美人草」なんか好きです。山本周五郎や藤沢周平、池波正太郎なんかに面白いものがあって、これらを「私の一〇冊」に上げている人も何人かいます。

小松左京「日本アパッチ族」。SFものの大傑作だと思います。小松左京のデビュー作の一つではないかと思いますが、こんなに面白い本をアンケートに応じた人が誰も選

んでいないのがオカシイと思うほどです。小松左京もずい分読みました。「日本沈没」なんかは、学問的な可能性をベースにしていたので、迫力がありました。アパッチの荒唐無稽度は、はるかにこれを越えたものでした。SFものでは、図書館の中ではジョージ・オーウエルの「一九八四年」が七点獲得して二十六位にいますが、これはSFの古典と言われるもの。でも、暗くてあまり楽しい読み物ではありませんでした。

セシル・スコット・フォレスト「ホレーショ・ホンフロアー・シリーズ」。これは一冊ではなくて、シリーズもので、全部で十二巻ほどあったと思います。この作品については、何時だったか紹介しました。全部ではありませんが、原文を買い溜めてあるので、時間が出来たら読むのを楽しみにしています。外国人者では、アーサー・ヘイリーとか、ジェフリー・アーチャー、フレデリック・フォーサイス、トム・克蘭シーなんかを好んで読みますが、「私の一〇冊」に上げた人がいたのは、フォーサイスとトム・クンシーが一冊ずつでした。父が好きだったクローニンの「帽子屋の城」を上げていた人がいたのが懐かしかった。

堺屋太一「油断」。若し、日本への石油の供給がストップした時に、どんなことが起こるか、を小説にしたもの。通産省の役人だった堺屋太一が実際に役所でやったシミュレーションを基に書いたもの、と言われるだけあって、迫力満点の面白い読み物でした。同じ手法で「ひび割れた虹」なんかを書いています。一番煎じて「油断」の迫力は感じられませんでした。最近では「峠の群像」「秀吉」等を書いて、小説家の仲間入りをし、とうとう大臣になってしまいました。何ととっても、堺屋太一は「油断」に尽きます。前に上げた小松左京の「日本沈没」も同じ手法で書かれたものですね。単なるSFものではなくて、近未来ものでも言うのでしょうか。「油断」は「私の一〇冊」に上げている人を一人発見しました。

ピーター・ドラッカー「傍観者の時代」。図書館の中でも、ドラッカーの「断絶の時代」を上げた人は何人かいました。確かに「断絶」の方が話題になりましたね。でも「傍観者」を上げた人が一人もいなかったのには意外の念を持ちました。この本の中で特に記憶に残っているのは、本人が接した世界中の偉人達に関する記述の箇所。フロイトとか

GMのスローンとか、それぞれに観察が鋭くて、生き生きと描かれていたのを思い出します。この人は経済学者の域を超えて本当にストーリーリー・テラーだな、と思わされたものです。

マーガレット・サッチャー「サッチャー回顧録」。サッチャー政権十一年間の出来事を書いたのですが、アイアンレディの面目躍如の回顧録で面白かった。政治家の自伝ものではリチャード・ニクソンの「指導者とは」も良かった。何かをやるうとした人の意欲みたいなものを感じさせられましたし、特に、世界中の政治家との付き合いを紹介している部分が面白かった。「私の一〇冊」にサッチャーを上げている人は何人もいました。ニクソンを上げている人は流石に一人もいませんでした。

渡部昇一「アングロサクソンと日本人」。私はどうやら、作家に凝って集中的に読む癖があるみたい。渡部昇一もその一人ですが、数多く読んだ中で、代表作を上げる、と言われたらこれを上げるだろう、と言つものです。十年程前に刊行された講演集みたいなものですから、人気著述家になる前のことになりませんが、それだけに内容が濃いような

気がします。同じ種類のやや右寄りの日本人もので、最近読んで感銘を受けた本に、藤岡信勝とか、谷沢永一とか、いくつかありますが、これらはもう少し時間が経って、ほとぼりが冷めてから評価した方が良いでしょうに思います。

数えてみたら、一冊違っていて、十一冊になりました。これから一冊を外すのは難しいし、惜しいので、字余りと言うことでご勘弁いただくことにします。「図書館」の整理で、日本の本、海外の本、それぞれ六十七冊が上げられていますが、その内、私が読んだことのある本は、夫々三十八冊と三十一冊、私が選んだベストテン・プラス・ワンは、日本の本の部で四十八位の「竜馬が行く」と海外の本の部で十四位の「チボー家の人々」の二冊のみでした。私も割りと本を読んでいる方だと思っていました。読む方向が違っていたのか、感じる感性が狂っているのか、読んだ本の種類も感じ方も知名人の皆さんとは大分異なっているようです。

(平成十一年一月一日)

「知識産業革命」 坂本 二郎

ハーマン・カーンが、二十一世紀は日本の世紀だ、と言ったというのはあまりに有名、
というか多くの人に言われすぎた感じすらある。実際にカーンがこれを書いたのは一九
六二年と言うから、もう九年も前になるが、日本人の間で有名になったのは、やっと昨
年のことだったか。本当は「二十一世紀が日本の世紀になっても意外ではない」という
言い方で可能性を述べたのみであり、比較として「それが米国であつても意外ではない
が、もしそれがソ連だったら少し意外だし、それが中国だったらもう相当意外で、もし
かしたら誰の世紀でもないかも知れない」という予測が記されていた。これが強調され
て、二十一世紀は日本の世紀、ともてはやされ、猫も杓子も日本の世紀になつてしまつ
た。今年の正月に佐藤首相が馬鹿の一つ覚えみたいに言っていた、という。

カーンは八年後の一九七〇年「超大国日本の挑戦」という著書でこれに触れ、この予
言が八年後の今でも間違つていなかったし、日本が二十一世紀にGNPで世界一になつ
ても当然、という言い方で可能性が更に大きくなった、としている。カーンの言うのは

もつぱら経済成長の面から捕らえているが、最近、別の意味で日本が新しい時代の先端を走っている、と主張する学者が多い。新しい時代というのは、いわゆる文明時代、脱工業社会、情報化社会等定まった呼び名がないが、産業という観点から歴史を捉えた場合、農業時代、工業時代に続く知識産業が中心になる時代である。知識産業時代の要素とは何か。人間が額に汗して手を使ってコツコツと物を作る時代は終った。知識が、情報を中心となり、人間の持つ創造性・知・情・意の能力を生かし、これを使って働く時代が来た、と言うのである。

新しい時代が来たことが何によって判断されるか。都市が巨大化する。都市に人口が集中する。都市と言うのはそこに住む人々の知識レベルを同一にするという意味で、大きい方が、又、出来るだけ多くの人が都市に住むことが、この時代にマッチしているという。テレビが普及する。都市の生活様式、即ち時代の先端に行く都市の生活、進取的なものの方が視覚を通して全国に伝わることになり、多くの人が時代の最も新しい生き方、考え方を肌で感じる事が出来る。この情報伝達方式は重要なポイントで、学

者によつては文字の發明、印刷術の發達に続くものとしてテレビ時代、と一つの時代に見なす人もいるほどである。大学生の数が増える。これは知識の均等化ということの意味があるという。これまで一握りの人々によつて独占されていた高度の知識が徐々に常識化してくる。知識のレベルが均等化して上がる、というのは知識産業時代の一つの要素である。そしてコンピュータの發達、膨大な量の情報を短時間に消化し、整理して人間がコントロールできるようにする能力はコンピュータを置いて他にない。

こういつた要素を数え上げてみると、日本はアメリカと共に時代の先端を走つて、この知識産業時代に入つて行きつつある。それもこの一〇年間で入りつつある、と言つのが表題の著書の中の坂本二郎氏の主張である。これまでは所謂先進国に追いつけ追い越せ、でやつて来たが、ここまで来ると一人当たり国民所得云々は別にして、今やお手本にするものが何もない新しい時代に先頭を切つて飛び込んでしまった、という。自身が新しい時代の方向を定め、正しい方向に舵取りをせねばならぬ、という警告も含まれてくる。上に挙げられた要素が日本にあるかどうか。

都市の巨大化。これはある。東京が大きいというだけではない。人口は都市に集中して来ている。新幹線により東京・大阪を結ぶ東海道は既に一日の行動範囲。大きなメガロポリスといえそう。これは世界でも米国の東岸の人口密集地帯に匹敵するという。公害とか、大きすぎることによる不便とかを除いて、知識の面だけから見れば上に見た要素はあるのかも知れない。

テレビの普及度。これは世界でも一・二を争う大変なものらしい。一億総白痴化か、と思っていたが、またテレビが普及するのは他に娯楽がないからであり、貧しい証拠かとも考えられるのだが、情報の伝達が正しく行われれば、とにかく、百聞は一見に如かず、が茶の間で実現出来るのだから、これほど確実に有効な情報伝達手段はないだろう。もっとも低俗なドタバタ番組がもてはやされている現在、むしろテレビの害毒の方が大きいように思うが、これは道具の使われ方ということになるのだろうか。

大学生の数を指標にすることについては小生自身大いに疑問を持った。数が問題ではなくて質の問題ではないのか。大学生の数が増えたからといって一概に教育程度が上が

ったといえるだろうか。かえってマイナスの要素を持っているのではないか。坂本氏はこの点も指摘している。しかし、全般的に質は下がったかも知れないが、その中の優秀な学生の数を数えたら、昔の程度の高いといわれる学生の數位にはなるだろう。それに続く学生達も少なくとも昔の中卒、小卒よりも高度の知識を得ているはずだ、と言つ。それと日本の場合、あらゆる層から大学生が出てくる、ということでも層が厚い。聞くとところによると、英国辺りでは、靴屋の子は靴屋、的なものの考え方、階層意識が強くて肉体労働者の子供が大学に行くのは稀だと言つ。そう言う点から考えれば、日本の大学制度、数が多いことも意味があるのかも知れない。又このことは日本が未来志向型の民族だ、と呼ばれる一つの証拠かも知れない。現在の自分より未来の自分を、自分より自分の子供を考え、幸福にしようとする考え方、これは時代の先端を走ろうとする我々にとって大切なことである。

こんな要素を挙げて人間中心の時代が来た、そのトップを走っているのは日本だ、と考えることは楽しい。でも、得てしてこの未来学者と呼ばれる人たち、坂本氏を含めて、

楽観論者が多いように見えてならぬ。何十年もの先を考える時は、現実から離れてみることも必要かも知れないが、もつと現実に足を踏まえたものの見方が必要だし、現実を良い方向に向けるためになるように思うのだが。

(昭和四十六年一月三十一日)

「脱GNP時代」

経済大国とか、GNPに対する疑問とか騒がれているし、色んな本が出ているので、手当たり次第乱読してみた。詰めて読む時間もないので、時間も掛かるし、密度も薄い18が、ロベール・ギラン「第三の大国 日本」、ホーカンソン「日本の挑戦」、金森久雄「経済大国 日本」、市村真一「試練に立つ経済大国」、ハーマン・カーン「超大国日本の挑戦」、平恒次「人間の経済学」。そして、これは、と違って面白く読んだのが、丸尾直美「脱GNP時代」。一読を勧めたい。

その前に、朝日新聞社編の「くたばれGNP」を読んだが、問題提起は確かにあるものの、ところによっては殊更問題を暴き出して大袈裟に騒いでいるところもあるし、第

一問題の提起ばかりで解決の方法が示されていない、所謂批判のための批判に終始している感じで物足りなかった。

ところが本著では、所謂福祉国家を目指す方向線がハッキリしており、移行の方法についてなかなか具体的に示されている。福祉国家の目標としてスエーデンがあまりにも模範視されているのが一寸気に食わなかったが、現存する福祉国家が殆どスエーデン一国とすれば、偏るのも仕方のないことなのかも知れない。

現体制の中から計画経済を進め、福祉国家へ改革して行こう、と言う訳だが「改革の理論」と言う章があつて、この中で、革命の論理、との対決を打ち出しているのが面白い。曰く、マルクス主義に洗脳された人間は、体制内から体制を変えて行く改革が出来る筈がない、と決め込んでいる、という。また、革命論者の思考方法は、イエスカノーカ、言い換えれば、「異議ナシ」か、「ナンセンス」か、と言う単純なもので、自分の考えていることだけが絶対に正しくて、他は皆間違っている、と信じ、他の理論を知らうとしない。だから現代トロッキストの連中はホンの少しの考え方の違いが決定的

な対立になり、分極化して行き、自分の陣営の内部ですら内ゲバを起こす、と言う。このような思考方法の下に革命により体制の改革が行われたとしても、何時まで経っても抗争が続き、大権力者が出て来て来て相手を全部粛清してしまうまでゴタゴタが続くだろう、という見方で痛快な論旨である。勿論、こんな簡単な論法ではない。色んな視点から現代トロッキストの考え方、マルクス主義者の考え方に痛烈な批判を加えている。この章を読むだけでも面白い。

改革の方法。私企業による自由競争を福祉国家の目的に添った方向に仕向けるために公企業を競争に参加させることが柱になる。計画経済とまでは行かない。ましてや財産の公有化なんてトンデモない。管理された社会へ進めよう、と言うことである。どの部門にどんな公社を作れば良いか、と言う具体案まで考えているのも面白い。

満員の通勤バスに乗って考えること。通勤バスなんて私企業がやって行ける性質のものか。企業が利潤を追求しようとするれば、出来るだけ少ない数のバスに出来るだけ大勢詰め込んで運んだ方が良い。少し位積み残しがあっても構わない。通勤・退社時のラッ

シユが過ぎれば、残りの大部分の時間はガラガラ。その間のバスに対する投資や運転手に対する賃金支払いは無駄になっていっているのだから。もっと頻繁にバスを走らせ、楽に乗せて貰いたい、と言つ乗客の希望と利潤を求める私企業の目的とは決して合致するものではない。ここで公企業のバスを走らせ、乗客の希望に沿つような補完をすれば良い、ということではないか。適当な例ではないかも知れないが簡単に言つてこれが管理された社会の精神ではないか、と理解した。

という形で混合経済を進める一方、社会保障を進めて行く。これまでの社会保障と言つと、いかにもミジメで暗いイメージがあるが、もっと積極的な社会保障があるはずである。生きていければ良い、という目的の老人ホームや身体障害者施設だけが社会保障ではないだろう。生甲斐のある生活を考えた社会保障が考えられるべきだ、と言つ。社会保障が進むと怠け者が増え、自殺が多くなると言つ考え方も社会保障のあり方に繋がる。飢えと貧乏を鞭にして労働のインセンティブを生み出す時代は過ぎた、と言つより、そつと言つ原始的な考え方は卒業しよう、もっと高次元の生甲斐というものをインセンティ

ブにして働ける社会にしよう、と言つ。そうすれば経済的に保証されたから、と言つて怠けようという幼稚な考え方はどこかへ行つてしまつたろう。生甲斐を中心にした社会保障が実施されれば、老人の自殺が増えることはないだろう。

先日、スエーデンの客と話す機会があつたので、この点話し合つてみたが、唯一の福祉国家といわれるスエーデンですら、やはり働かなくても生きて行ける、となると怠け心が出るという。飢えと貧乏に代わるインセンティブと言つのは中々難しいもののようにだ。人間とは弱いもの。生甲斐だ、何だと言つても生理的苦痛さえ逃れられれば怠けた22いのが人間の本能なのかも知れない。

読んで行くとこの筆者、同盟の福祉ビジョン委員会の委員らしい。とすると今日の紹介は手前味噌ということになりそう。労働組合時代に考えていたこと、考えさせられたこと、同盟や民社党の考え方をそのまま肯定するような言い方をしているのは、組合に
いる間に、知らず知らずの内にその考え方に洗脳され、のめり込んでしまつた、と言つ
ことなのかも知れない。

(昭和四十六年六月二十七日)

司馬 遼太郎

司馬遼太郎は、ずいぶん分読んだ。長編は殆んど言つてよいほど読んだと思つ。司馬遼太郎の関連の読後感を幾つか紹介する。

川口兄が司馬遼太郎を読むと聞いて、スツカリ嬉しくなつた。小生も五・六年前「竜馬が行く」を読んでから、司馬の大ファンである。歴史ものだが、この作者の場合、明治維新に關係するものが特に面白い。「国盗り物語」など古い時代のものもあるが、いかにも現実離れして小説めいてくる。「坂の上の雲」も完結編の第六巻の出るのを待つて読んだが、やはりもう一つと言つ気がする。坂本竜馬や大村益次郎、吉田松陰等を書くときの迫力には敵わないような気がする。歴史小説というのは、やはりその時代のことをどれくらい勉強したか、が作の深みになつて出て来るのだから。初期の作と思われ

る短編集のあとがきに、次の一節を発見し、益々好きになった。彼が見た歴史は、そのまま事実に近いものとしてこちらにも信じさせて貰うことにしている。

「元来、小説には型も定義も法則もあるまい。私なりに語りやすい形式で書かせてもらっている。歴史家はこれを小説と見、読者はこれを歴史と見てもらって、しごく差し支えない。この集の諸編はすべて、私の可能な範囲で確かめ得た資料の沈殿物で書いた。すくなくとも小説を書くために、資料を都合よく曲げると言つようなことはしなかった。」

歴史小説も作者の好みと得意・不得意があるらしい。司馬の場合は、幕末・明治維新でも、倒幕の側に立つた人を書かせる方が面白い。徳川慶喜を書いた「最後の將軍」や河井継之助を書いた「峠」など、幕府の側から書いたものもあるが、あまり同情がない。それより、岡田以蔵とか、大村益次郎を書いた短編の方がキラリとしていて温か味があって面白い。

これに反し、子母沢寛の場合は、幕府側の人たちを書かせると、これが面白い。子母

沢の場合、薩摩や長州が嫌いでもたまらないらしい。滅んで行くことを知りながら、歴史の流れの中でどうしようもない。それでいて、その流れには乗ろうとせず、世の進みを斜めに見ている。最後まで將軍様のご恩を感じ、そのために死んで行くような人を書かせると何ともいえない哀愁があり、その気持はその気持でとても良く判って面白い。面白いと言ってはいけないのかも知れない。衰退産業の修繕船業の中にいる自分の現実に照らして考えさせられることが多い。

昨年夏、欧州を三週間歩き回り、病み上がりの家内と子供を残しながら、不人情なようだが、少しもホームシックめいたものを感じなかった。暇を見ては盛んに絵葉書を出したが、帰りたいとは少しも思わなかった。そう言えば、六年前香港に行った時も、少しも帰りたいとは思わなかった。その日その日を過ごすのが興味深く、同時に大変で、短い半年だった。あの半年、日曜日に退屈だ、と思ったことなんて一度もなかったな、と良く思い返したものだ。良くやることがあった、とも言えようが、小生自身割と郷土意識が薄いのかも知れない。

ところが昨年の一週間の旅の帰り、コペンハーゲンで東京行きの日航機に乗り、本棚を見ると司馬の本がある。「歴史と小説」と言う随筆と対談集で、言ってみれば比較的阅读難いものだったが、飛行機の間中、それこそ夢中で読んだ。日本人がいかなるものか、がシミジミ判ったような気がして感激して、時々は嗚咽せんばかりに泣きながら読んだ。そして日本人がたまらなく好きだ、と言うことを改めて認識し、日本がとても懐かしくなり、初めてホームシックに罹った。

(昭和四十七年十二月二十三日)

「八人との対話」

私が司馬遼太郎のファンであると言うことは、大分前にご紹介したことがあります。きっかけは、故岡崎に借りた「竜馬が行く」でした。すっかり好きになって、司馬作品は殆んど全部といて良いほど読みました。その頃は歴史もの、それも明治維新を主に書いていたので、今度は明治維新に興味が移り、維新関係の本もずい分読んだ覚えがあります。当時も紹介した記憶がありますが、何かの短編集の後書きに「自分の書いたもの

は、実際の歴史と思って貰って良い」と言う意味のことを書いていました。それだけ深く調査していると言う自信がこう言うことを書かせたのだと思います。その後は「街道を行く」と言った歴史探訪ものや紀行ものを沢山書いていますが、これも詳しい。こう言ったものを読むと、歴史を調べて行く過程でどれだけの勉強がなされたのか、が良く判るような気がします。やはり、この人の書いた歴史はフィクションではなく、事実なんだと思わされるのです。調査チームみたいなものが付いているのかも知れませんが、それにしてもそれらの知識を皆自分のものにしてしまっているのが凄いと思います。「オランダ紀行」なんかを書いてオランダにも詳しいのです。私がオランダで知り合ったオランダ通の人が司馬さんとも親しくて、一度、ハウステンボスの神近社長と食事をさせたことがあるのだそうです。ご想像頂けるように、神近社長と言う人は、かなりの自信家で、自分の知識や記憶は人に負けない、と信じているところがあって（実際、敵わないと思わされることが多いのですが）人に会うと相手には喋らせず、自分が喋りまくることが多いのですが、司馬さんと会った時、自分の郷里の西彼杵半島の話を始め

ら、得意分野の地元の話なのに、司馬さんの方が詳しいので、閉口して全く喋らなくなってしまう、という話があります。隠れキリシタンのことなんかを書くために、この地方にことを大分勉強されたことがあったらしいのです。いつもの社長を知っている我々には凄く良く判る話で、その時の社長の顔を想像して大笑い出来るし、司馬さんの凄みと言うか迫力が具体的に判るような気がしました。

最近「八人との対話」という本を読みました。山本七平、大江健三郎、安岡章太郎、丸谷才一、永井路子、立花隆、西沢潤一、上智大学の教授でドイツ人のアルフォンス・デーケンといった所謂知識人たちの対話集なのですが、面白い。歴史が出て来、歴史上の人物が出て来ても同じ土俵で議論出来るのが素晴らしいと思います。お互いが同じレベルの知識をもっていなければ、こんな会話は成立しません。こう言うのを知的会話を楽しむと称するのではないか、という気がしました。

山本七平との対話は、戦争体験の話から始まるので、何だ、いつものパターンじゃないか、と思うのですが、第二次大戦の日本の参謀本部が如何に無能だったかと言う話か

ら、西郷隆盛と大久保利通の比較論になり、家康から義経まで行って田中角栄まで戻つて来る。日本人の意思決定の方法は責任者が責任を持つてするのではなくて、組織の総意でやる。組織に強い核があるのはむしろいけないのであつて、中心にいる人は空になつていなければならない、と言ついつも山本説になるのですが、これは日本人の育つた地理的環境 日本人は基本的に盆地に育っている がこつ言つ考え方を作つていんだ、と言つ結論になる。こつ言つのを自在の論議とでも言つのでしょつね。

大江健三郎との対話では、吉田松陰と正岡子規を並べて教育論を戦わせるのですが、これがまた具体的で、温か味があつて良いのです。弟子達の特徴を一人一人適確に見定める、愛情を持つて見るところが二人に共通しているところだ、なんてお互いに色々な具体例を挙げながら合意したりします。

安岡章太郎とはかなり親しい友人なのか、とてもざつくばらんな話になつて本当に面白いのですが、貴族と言つものは何もしないし、つまらない人間が多いけれど、教養だけは積んでいたという話は面白かつた。中国の貴族も同じで、歴史上の人たちが書いた

書を集めた書道展に行ったら、歴史的には大したことのない王様なんかが凄く良い字を書いている。中によれば抜けて下手な字を書いている人がいる。見るとこれが孫文なんだ。そうで、悲しいほど下手な字だ、なんて。これが民主主義って言うものかと思った、なんて痛烈で面白い。また、それを二人とも知っていて、そうだそうだと言っている辺りが面白いと思うのです。

立花隆の「宇宙からの帰還」は私も読みましたが、宇宙体験の前と後では人間が変わると言う話です。地球を神様の視点で見るので、人生観が変わってしまうと言っ訳です。それなら日本の政治家どもをスペースシャトルに乗せて宇宙でサミットでもやったらどうか、という話になります。田中角栄なんか金があるのだから、自費で行って帰ってきてみたら良い。そうしたら帰って来た人は人間が変わって良いけれども、政治家としては失業してしまうのではないか、なんて話、面白いでしょう。

西沢潤一との話では、西沢先生が東北大学の学長である所為か、東北人の話になるのですが、東北の人は人に流されず、自分でものを考える傾向にある、と言います。例と

して、石川啄木、宮沢賢治、太宰治なんかが出てくる。米内光政、井上成美辺りまで来ると、成る程と思えるのです。現在の日本人の文化は室町時代に始まっていると言う話も出て来ます。それ以前の、例えば紫式部とか源頼朝なんかは同じ日本人とは思えない。それ以後の人は現在の尺度で日本人として理解が出来るのではないか。その室町時代から明治・大正までの人には、自分で自分を律する日本的な意味での倫理があった。今は日本人の人格が非常に浅く狭くなっている。周りのことを考えず、全体の中の自分を意識することが少なくなっているから、色んなことで外国からも謗られるような状態になる。この辺で精神の電池を入れ直さないと、このまま行ったら日本は潰れてしまう。なんて話は最近のPKO論議にピッタリの話題です。

それぞれの対話の中で、時代がドンドン飛ぶ。その時代の人の名前が次から次へと出て来るのですが、その人がどこでどう言っているとか、どこで何を書いているとか、が、双方から自在に出て来るのです。司馬遼太郎は所謂学者ではないけれども、小説を書く過程で勉強し、蓄積して行った知識がこう言う対話を可能にさせるのだな、と感心させ

られました。

(平成五年八月一日)

「大阪侍」

司馬遼太郎と言うと、川口兄が次々と紹介してくれているように、大作が有名になっていますが、これらの大作は、全部と言って良いほど、新聞や雑誌の連載として書かれています。同じ時期に、全く違ったテーマの連載が三本も並行して続いていることがあります。この辺は小説家のプロの部分だとしても、よくやれるものだと思います。

古いものから辿ってみますと・・・

坂本竜馬を描いた名作「竜馬が行く」は昭和三十七年六月から四十一年五月まで「オール読み物」に連載。土方才蔵が主役の「燃えよ剣」も、三十七年十一月「週刊文春」に連載を開始し、三十九年三月完結。さほど長編ではありませんが、私の好きな雑賀孫市の話「尻啖え孫市」は三十八年七月から三十九年七月まで「週間読売」に。斎藤道三、織田信長が活躍する「国取り物語」は「サンデー毎日」に三十八年八月から四十一年六

月まで。山内一豊の「功名が辻」は、何処かの地方紙に三十八年十月から四十年一月まで連載されたそうです。長岡藩の河井継之助を描いた「峠」は四十一年十一月から四十二年五月まで「毎日新聞」に連載。正岡子規と秋山好古・真之兄弟を書いた「坂の上の雲」は四十三年四月から「サンケイ新聞」に連載を開始し、四十七年八月完結。吉田松陰と高杉晋作を描いた「世に棲む日々」は四十四年二月から四十五年十二月まで「週刊朝日」に。四十四年八月から四十六年十一月まで「朝日新聞」に大村益次郎の「花神」を。西郷隆盛と大久保利通の「翔ぶが如く」は四十七年十一月から五十一年九月まで「毎日新聞」に。四十八年の一月から五十年九月まで弘法大師の「空海の風景」を「中央公論」に。四十八年五月に黒田如水の「播磨灘物語」を「読売新聞」に連載開始、五十年二月完結。幕末の蘭方医松本良順の活躍を描いた「胡蝶の夢」は五十一年十一月から五十四年一月まで「朝日新聞」に。五十二年の一月から五十四年五月にかけて「漢の風、楚の雨」と言う題で「小説新潮」に連載されたものが、後日、若干の加筆を経て「項羽と劉邦」になっています。高田屋嘉兵衛を華々しく描いた「菜の花の沖」は五十四年四月

から五十七年一月まで「サンケイ新聞」に。正岡子規に関わりのある人たちを淡々と書いた「ひとびとの聲音」は「中央公論」に五十四年八月から五十六年二月まで。六十歳を過ぎた五十九年一月から「韃靼疾風録」を「中央公論」に連載開始、完結六十二年七月。

司馬ファンを自任する私は、これらの大作は全部持っていますし、読んでいます。読み方の深さは別ですけど……。一寸興味があつたので、これらを線表にしてみました。表にしてみると、同時期に線が重なる部分が多くて、全く異なるテーマを同時進行で連載している様子が良く判ります。

大作も良いけれど、私は短編も好きです。初期の頃は、忍者ものを好んで書いていたようです。司馬文学には女は出て来ないとか、女性を書くのが得意でない、と言われませんが、短編には女性が主役になっているものも沢山あって、それぞれに色つばくて、賢くて魅力的な女性が描かれています。

初期の頃に書かれた短編には、後にこれを広げて大作にしたのだな、と思うものもあります。「鬼謀の人」なんて短編は明らかに「花神」の原型ですし、「英雄児」は「峠」の原型になっています。いずれも歴史の埋もれた部分を探し出して来て、自分が理解した範囲の歴史として書いているものと思われまます。前にも書きましたが、幕末に勤皇の志士達を次々と斬って、凶暴な人殺しとしての評価が一般的な岡田以蔵を、むしろ愛情を持って書いた「人斬り以蔵」の後書きに、「この集の諸編はすべて、私の可能な範囲で確かめ得た資料の沈殿物で書いた。少なくとも小説を書くために資料を都合良く曲げると言うようなことはしなかった」と言う一節を発見し、それ以降、私は司馬さんの書くものは歴史的事実と信じることにしています。

評論家の吉田健一は司馬さんを大層鼻屑にした人ですが、司馬さんの作品の幾つかを評して「何れも歴史と呼んで少しも差し支えないものであって、歴史を書くのにこれ以外の方法はない」とまで言っています。私の評価も満更ではない訳です。

「大阪侍」と言う短編小説は、小説を書き始めて間もなくの昭和三十四年に書かれて

います。司馬さんは同じ年に書いた「梟の城」と言う小説で第二十四回の直木賞を受賞して小説家の仲間入りをし、三十六年には産経新聞を退社して、専業の文筆生活に入るので、直木賞の選考者評を読むと、「梟の城」はこの「大阪侍」とセットで受賞した経緯が判ります。

徳川家康が若い頃、武田勢と戦ったとき、自分は礫になりながら忠義を尽くした鳥居強右衛門と言う侍の子孫が、幕末の頃大阪にいて、三〇〇年間扶持を受けた恩返しに、と、上野の彰義隊の手伝いに行く。負けて帰って来て、大阪の材木屋の養子になるまでの話で、お話としても、小気味の良い面白い話なのですが、ところどころに、古物商の家に伝わる大福帳に書いてある事実や、明治になってから、材木屋になった本人が、人に語った話などの出展が記されていますから、事実こんなことが、どこかで本当にあったに違いない、と思わされて興味が増すのです。

司馬さんと言う人は、古い文書を読むことを趣味にしていたような人で、そうした知識を積み重ねて自分の中で発酵させて小説として書いて行っただけと言います、何かのテ-

マで書こうとすると、まず古本屋に頼んで、そのテーマに関する文献を、ある限り集めて貰って、それらを読んで取捨することから始めたと言われます。この種の調査をするのに、調査チームを作って調べさせて、その結果のエッセンスを書いて行くと云う手法を取る作家もいると聞きますが、司馬さんの場合は、これを全部自分でやったそうです。その知識が自分自身の中に蓄積されているから、晩年に盛んに書いた評論とか、日本論、紀行文などが深く面白く、各界の知識人との対談も本当に面白い。小説家でありながら、学者や文化人たちと丁々発止の議論が出来るのです。凄い人がいたんだな、って思います。前にも書いたことがありますが、司馬さんがウチの神近社長に会ったときのこと。神近が自分の故郷の西彼町のことを話し始めたら、司馬さんの方がこの土地の歴史や文化に詳しいので、閉口してしまって、何も喋らなくなってしまった、という話があります。「街道を行く」か何かの取材で、この辺りを調べられたことがあって、これが知識として蓄えられていたので、こんなことになったのだと思います。只でさえ自信家の神近が、元役場の役人として、一番の得意分野であるはずの自分の故郷のこと

で、頭が上がらなくなって閉口している姿なんて、想像するだけでも面白く、それだけ司馬さんの凄さが良く判るのです。

今日は、司馬遼太郎は短編も面白いですよ、と言う紹介になりました。

(平成九年十月一日)

イザヤ・ベンダサン「日本教について」

イザヤ・ベンダサンの「日本人とユダヤ人」は面白かった。一二〇万部売れたそうである。引用が豊富で面白く、判り易かった。日本人にはこんな面があつたのだ、と教えられるところが多かつた。ベンダサンなる仁が果たして本当にユダヤ人であるかどうか、と言うことで一時話題にされたことがあつた。僕も「日本人と・」のときはよく勉強した外国人もいるものだ、と感心したが、「日本教について」を読むと、これはもうどう見ても日本人が書いたものと考えざるを得ない。特に、後半の朝日新聞の本多勝一氏とのやり取りなどは、正に日本人同士のヤリトリだと思つた。僕の友人で、ベンダサン

は遠藤周作だ、と主張して譲らない男がいる。ああいうふざけた手法で物を書くのは周作の癖だし、一番の根拠は名前にあり、という。ご存知の通り、周作の号は「雲谷齋狐狸庵」というが、これは「ウンコ臭い Korean（朝鮮人）」をもじったものだとこのことで、汚いものに引つ掛けるのも同氏の癖だと言う。イザヤ・ベンダサンもこれは「イザヤ便出さん」と読むのだ、とのこと。文体とか発想とか、そう言うものから推定できると面白いのだが、残念ながら周作の作品はあまり読んでいないので、自分では判定が出来ない。

ところで、この「日本教について」。中々難しい本である。最近あまり物を考えながら本を読む癖のついていない小生には、読み続けるのが苦痛になるほどのものだった。後半は上述の本多勝一氏の公開質問状を巡っての言い争いが入って来て、特に本多氏側からの反論がエゲツなくてどぎつく、悪意に満ちて大人気なく嫌気がさした。反面、物を書く以上はその現れるものに責任を持つべきで、軽々しく考えて良いものではない。考えてみれば怖いものだ、ということを教えられ、あまり思いつきをチヨコチヨコ書く

ものではない、と自分自身を反省した。

その中で、例の三島切腹事件と吉田松陰を対比した司馬遼太郎の文に触れているところがあつて面白かつた。日本人は皆日本教という特殊なものの考え方を持つ集団だが、日本教の一つの特性として、思想は思想、現実 is 現実、とはつきり割り切つて、分けて考えているところがある。ヨーロッパ人にはソクラテスの昔から、思想と現実とは常に一致させるべし、とする考え方があつて、この辺が根本的に違つ。ところが日本人も政治の場では思想と現実とを一致させようとする傾向が強く現れる、という。これを最も純粹に貫こうとしたのが吉田松陰だつたらう、というのである。僕もつい最近「世に棲む日々」を読んだので、司馬さんの考え方が良く判り、なるほどと思つた。三島の場合も純粹さが過ぎ、思想を現実化しようとして自分は死なねばならぬ羽目になつた、という。ところで司馬さんの面白い点は、三島の現実離れた思想に対し、自衛隊員や大衆の反応が否定的かつ冷淡なものであつたことを取り上げ、日本社会が健康で堅牢である証拠、と言っている点で、ベンダサン氏はこれが日本教の真髄だ、という。

自分を反省してみると確かにそう言うところがある。僕なんか特に、現実を肯定しようとする傾向が強い、と自分でも思っているくらいだから、理想とか思想（と言えるほどのものはないにしても）があっても、それはそれとしてソツとしておいて、それとは全くかけ離れた現実の中にいて大して不満を感じない。いつかは・・・という考えがあり、理想に近づこうと努力している、といえれば格好は良いが「そんなことを言っただけで君、それは理想論というものさ」と言つ様な言葉が割りと楽に口から出てくるような気がする。諸兄の書いているものを見ると、茂木兄を理想派と言うか純粹派の総帥として、僕なんか現実主義者の最右翼に属するような気がする。それが理想に重きをおいてものを言わねばならぬ組合の仕事をやらされたというのだから、それこそ理想と現実の板ばさみになってどんなに苦しい思いをしたか、ご想像願えるのではないかと思う。

（昭和四十八年二月二十七日）

「油断」(ロンドン便り) 一〇

「油断」と言う本を読んだ。相当話題になる本だと思われるので、諸兄も既に読まれたこととは思いますが、若しまだなら是非一読をお勧めしたい。

筆者は堺屋太一なるペンネームだが、某中央官庁の課長の由。実際のシミュレーションの結果出てきた予測を、多くの人にアピールするため小説形式にしたと言う。小説としてはゴツゴツした感じたが、事実を背景にしていると言う迫力が随所に見られ、引き込まれるように一気に読んだ。

全くと言って良いほど石油資源を持たぬ日本が世界一石油依存度の高い国になっており、他国の石油に頼り切りになっている。現在は一見平穏に見えるが、例えばアラビア海の狭い入り口が封鎖されるような事態になったらどうなるか。これは全く他動的な与件で自分達がどうこう出来る問題ではない上に絶対あり得ないことではない。明日にでも起こる可能性を秘めている事態だと思う。こうして十分な石油が日本に入ってきたらどうなるか。

とにかく石油の供給が現在の三〇%になったら二〇〇日の間に三〇〇万人の生命と

国民の財産の七〇％が失われると言う試算が出来ているという。この小説では、こうした事態が不幸にして起こったと仮定し、政府が、役人が、一般大衆がどんな動きをするか、どんなことが起こるか、が語られているが、日本人の性格と機に及んでの対処の仕方、適切な対策を講じてきたとは思えぬ日本に対する諸外国の反応など、一つ一つがうなずける気がするし、それだけに真実味と言うより、凄みが感じられた。

筆者はテクノクラートとしてかかる事態を予測し、それに対する手を打ちたいと思っているが、党利を重視し自分の立場や地位を優先する政治家の抵抗に合い、住民パワーと称する一種のエゴの圧力を恐れて必要な施策が講じられない現実に憤りを感じ、こう言う形で警告を発しているものと思う。石油依存度を少しでも減らそうとする努力、石油備蓄量を増やそうと言う努力が、つまらないことで挫折して行く。筆者の立場上、官僚の立場を弁護しようとする傾向はあるが、結局官僚の考える何の施策も実現せぬまま不幸な事態に突入し、日本国民は手ひどい打撃を受けることになる。誰のせいか、が追及されるとき、住民パワーの尻馬に乗って活躍した代議士や学者がブレイムされる辺り

も面白い。ある企業家が自分のリスクで適切と思われる手を打ち、これがため大儲けをすることになるが、これとて結果論であつて、それなら何故政府もやらなかつたのか、と反論されるとグーの音も出ない。この辺は大企業横暴の声ばかりが高く、大企業が本当に何を考え何をやっているかを知らぬままに悪者呼ばわりしている最近の風潮を批判しているものと思われる。力のあるものがやることは目立つからアレコレ言われるが、将来を考え、皆のためになることの多くがこうした企業の力でなされていることも事実。国民皆がもっと賢くなって、良いことと悪いことを見分ける眼を持つことも必要かと思う。

不幸にしてこうした事態が発生したとき、日本全体が何処へ行くかも問題だが、ひるがえつて弱い女房、子供を守つて行かねばならぬ我々はどうしたら良いのか。今の自分に異常事態を受け止め、家庭を守り切るだけの力があるだろうか、と考えるときに慄然としたものを感じる。

石油危機のとき「日本が置かれた立場を日本人皆が認識する絶好の機会だから、この

機会がもう少し続いてくれた方が良かった」と書いたことを思い出す。あの時は危機感が充分に浸透せぬまま中途半端のまま解決してしまい、その後は何事もなかったかのようになっているが、こうした現実は一人でも多くの人々が認識し、真剣に考えられるべき問題だと思う。この本が一人でも多くの人に読まれることにより一人一人がもつと賢くなつて我々の将来を考える一つの契機となり、取り敢えずはお互いが譲り合い、我慢しあつことぐらいから始めるべきではないか、と考える。（昭和五十年八月二十四日）

最近読んだ本

一、「一九八四年」 ジョージ・オーウェル

私は、未来もの、が割りと好きで、「一九七九年の大破局」「英国脱出」（正・続）など好んで読んだし、堺屋太一の連作は「油断」から「ひび割れた虹」まで四冊とも読んでいる。これらの未来ものを読むと書評とか後記などに必ずと言って良いほど出てくるのが、「この「一九八四年」と言う本で、どうやら未来もの、SFものの古典とでも言わ

れるものになっていくらしい。前々から読んでみたいと思っていたが、最近になって探し出したので読んでみた。有名な本だからもつと大きな本かと思っていたが、文庫本になってしまつと大したことはない。一九四九年に書かれた本で、三十五年先の世界を予測している。当時としては大変な未来小説だったのだろうが、今になってみるともうすぐそこ、五年先の話である。パツとした大きな出来事の重なる派手な小説を期待していたら、まるで地味な暗い読み物で少々ガツカリした。一九八四年には世界が三つの勢力圏に分かれ、夫々が全体主義社会体制になってしまつていく。主人公の住む旧英国も完全な管理社会。寝ていても起きていても、テレスクリーンなる受発信装置に監視されている。本人の仕事は過去の歴史を現在の体制維持に都合の良いように書き換える仕事、と言つておおよそ夢も希望もない社会が描かれていた。まさか五年後にこんなつまらない時代が来るとは思えないが、こんな読み物が未来小説の古典になつていくこと、そのこと自体が恐ろしいことに思えた。

二、「傍観者の時代」 ピーター・ドラッカー

大分前に「断絶の時代」を読んだ時はさして感じなかったが、この本を読んで、ドラッカーと言う人は大変なストーリー・テラーだと思った。自分でも経済学者という認識はしていないようだが、まさに経済学者の書いたもの、という感じは全くなく、読み易い、興味深い読み物だった。ウイーンに生まれ、ナチの進出を逃れてアメリカに出てきた自伝の部分がさり気なく含まれているのが興味深い。

フロイトとかジエネラル・モータースのスローンとか有名な人の話も面白いが、祖母とか伯父伯母に当る人とか、何でもない人々の中にその人の価値を発見して行く、そして自分自身も何かを得て行くし、読者にも何かを教えてくれる。教師の二つのタイプを対照させたミス・エルザとミス・ゾフィーなんか面白かった。ヒットラーに反抗して、ナチスのオーストラリア侵攻の日に自殺した最後の貴族の話とか、キツシンジャーを育てたと言われるクレーマーとの若い頃からの付き合いとか、ナチスの中でも怪物と恐れられていたヘンシュとか、付き合いの広いことには驚かされる。当時は世界がそれだけ

狭かったのか、能力があるから出会いが豊かになるのか、あれだけの出会いがあったからこそあれだけの人になれるのか。坂本竜馬が西郷隆盛を評して、太鼓のような人だ、と言ったという話が、勝海舟の「氷川清話」の中に出て来る。大きく叩けば大きく鳴るし、小さく叩けば小さくしか鳴らない。いくら立派な人に接する機会があっても、こちらがそれだけのレベルの達していなければ価値ある出会いにはならない。大きな太鼓からは大きな音の出せるような人間になりたいものである。

三、「日本商人事情」 深田 祐介

相変わらず日本人ものを探して読むことが多い。「和魂和才のすすめ」「日本人は日本を知らない」「それでも日本は成長する」なんか読んでみるが、もう沢山だ、という気がして来ている。てなこと言いながら、また「ザ・ジャパニーズ」なんか買ってきている。どれもこれも同じだ、と思いつながら。

深田祐介の本は、語り口が軽くて好きなので殆んど逃がさずに読んでいる。この本も

面白かった。色んな企業の海外駐在員の話の聞き語りだが、捉えどころが面白い。アフリカのキンサシャに行っている柔道部後輩の清水の話が出ていた。駐在員の苦労話は、自分が似たような目に遭っているので、身近に感じられるのだらう。

ところで深田祐介なんて、日本航空の広報部次長とやらで、社内でも颯爽とやっているのかと思っていたが、出版関係をやっている高校時代の友人に聞いたら、社内では全く重きを置かれず、意外にシユンとしている、と言う。その道で身を立てる気なら良いが、企業の中にいて、ものを書いて有名になるのは本人にとって決してプラスにならない。日本の社会にはまだ受け入れられ難いことだ、とその男が言っていた。

(昭和五十四年九月二十四日)

「文芸春秋」

バタバタ走り回っている割には本を読む方ではないかと思う。会社に入りにしている本屋によると、丸の内界隈のサラリーマンの一ヶ月の本屋への支払いは平均三〇〇〇円

程度とのことだが、小生の場合、八〇〇〇円から一万円になるから本屋にとってはどうやら力毛らしい。一寸目新しい本が出ると売り込みに来る。あまり流行りに乗ってばかりいるのも癪だから時々抵抗して、金がない、とか、これは止しておこう、何て言ってみるが、何度か広告を見ているうちにやはり読みたくなって注文してしまうことになる。日本人もの、未来もの、経営ものが何となく多いが、最近少々食傷気味。「ジャパン・アズ ナンバー・ワン」とか「乱気流の経営」辺りはもう結構という感じで、あまり熱心に読めなかった。フリードマンの「選択の自由」は面白くて、今読んでいるところ。小説も最近では企業ものが良く読まれる。アーサー・ヘイリーは読まされてしまい、読めば面白い。

雑誌は「週間ダイヤモンド」。一時は「東洋経済」にしていたが、どうもアカデミック過ぎて読むのに時間が掛かって仕様がなない。電車の中で読むにはどうにも不適なのでダイヤモンドにしたら、こちらはとっつき易くて良い。適当に政治経済情勢が解説してあるし、一番の楽しみはポール・ボネの「在日フランス人の眼」。これについてはいつ

かまとめて書いてみようと思っているが、何時もながら面白い視点から日本人を観察しているのを読まされてしまう。

毎月購読しているのが「文芸春秋」。学生時代や会社に入りたての頃は大きく面白く思っていたが、高校の頃、相当左がかった先生がいて、「文芸春秋なんかは左ぶつて残っていて何となく抵抗を感じていたのかも知れない。購読し始めてからもう七・八年になるが、少し年を取って視点が合つて来たのか、面白い。ロンドンにいる間なんか、珊瑚の次くらいに楽しみにしていたものだった。田中内閣をつぶして有名になった立花隆の「田中角栄研究」、同じく「共産党研究」なんか、取り上げ方は別として、よく突っ込んで勉強してあると思った。七月号の角栄研究の続編も面白い。森嶋／都留岡教授の経済論争は森嶋教授の突っかけに都留教授が乗らなかつた感じ。森嶋／佐橋の防衛論議、天谷直弘の町人国家論など興味深い論戦が続く。自分自身の視点というか、ものの見方・捕らえ方、ポイントが合っているらしく、面白く読める。面白いのは時期に合わ

せた政治経済小説、というよりドキュメンタリーもの。安宅産業を扱った「空の城」、イラン革命の「黒と白の革命」。いずれも解説版の積りで読んだ。

八月号の渡部昇一の「自助論」も良かった。フリードマンが「選択の自由」の中で繰り返し言っているのは、経済を駄目にするのは国家の干渉だ、ということ。英国経済を駄目にしたのも、アメリカ経済を駄目にしつつあるのも、これ、と言う。自助論も正にこの考え方。同感できる。

文芸春秋の取り上げ方は決してアカデミックではないが、軽くもなく重過ぎもせず、我々程度のサラリーマン向けの読み物として格好のレベルを狙っているように思える。

(昭和五十五年七月二十日)

五木 寛之

五木寛之をジックリ読んで見たい、と考え始めてからもう少し分になる。現在の娯楽小説家(と言うと非常に通俗的になるが、エンターテナーとしての小説家、とでも言え

ば良いのか)の中では第一級だと思っている。カツコウが良すぎるところが男に反発され、むしろ女性に人気が高いと言う人もいるが、私は好きである。全集でも欲しい、と思ったのがもう六・七年も前になるが、あくまでも娯楽であつて何度も読む本ではないし、第一高いので諦めている。通勤電車の中で読むのが最適で、こんなのを読んでいると長い通勤時間が全く苦にならず、かえつて楽しみになる位。ところがこの種の本だと往復で一冊位読んでしまうから金が掛かつて仕様がなない。ずっと我慢して来た。そこへ今度の病院騒ぎ。徹夜の眠気覚ましと付き添いの無聊に、と文庫本を買い込んで読むことにした。

五木の小説を大藪春彦と比較した評論を見たことがあるが、この二人はまるで違つて思う。比較の対象にならぬとさえ思う。片やバイオレンスそのもの、と言うよりバイオレンスだけ。五木には心がある。五木文学論が既に存在するのに驚いた。現在、法政大学の教授をしている駒尺とかいう女史が書いている。それによると五木は教育者の家庭の育つた亜エリートだそうである。韓国で幼少時代を過ごし、敗戦で酷い目に遭い、

引き揚げで苦勞した。早稻田の露文を經濟的理由で中退している。その後、業界紙やP R誌の編集、広告代理店のプロデューサー、CMソングの作詞などの様々の職業を渡り歩いた後、小説を書き始めたのは三十三才、ロシア、北歐へ旅をしてからだという。

デビュー作が「さらばモスクワ愚連隊」。これが小説現代の四十一年の新人賞。「蒼ざめた馬を見よ」が四十二年の直木賞の受賞作となった。

駒尺女史は五木の本質は、浮草の心、雜民の魂、と言う。それは引き揚げ時の苦勞であり、学生時代の金銭面の苦勞、卒業後の遍歴によって作られたもの、と言いたいのだろう。その辺のことはどうでも良い。

私が惹かれる理由は、芸術であれ、運動であれ何であれ、若いときに一つのものに対してトコトン打ち込み、一流になりかけたのに、何かの理由でその道で身を立てる一歩手前で中断してしまい、今は何か全く関係のない仕事をして生きている人が出てくるどころ。「さらばモスクワ愚連隊」では音楽。ピアニストとして、ブルース奏者としても生きて行けたであろう男が、芸能ブローカーをやっている。音楽を愛する気持は失つて

いない。又それだけの腕がある。だから何かのとき、それがキラリと出て来て、モスクワの不良少年を更正させたり、コチコチのソ連の官僚の心を動かして涙を流させたりする。その辺の描写がたまらない。音楽をテーマにしたものは、この他「Gイーブルース」「白夜のオルフェ」「艶歌」「青春の門」の一部。絵に対する造詣の深さを示した「戒厳令の夜」。とにかく芸術によつて受けた感動を文章に出来ると言うことは素晴らしい事だと思つ。若い頃、学生運動に熱を上げた人々を書いたのが「内灘夫人」「ソフィアの秋」「テラシネの旗」。「戒厳令の夜」では自環法なる護身術をマスターした男が出て来る。雑念を除けば人の動きが細かく早く見え、自分の身体が自然に反応するから、その辺のボクシングや空手には負けない。題名は忘れたが、車の運転に一流の腕を持つ男の話もあつた。車についても相当詳しく、描写にも迫力がある。自分でもある程度やらないとあれだけの描写は出来ないのではないかと思つが、そんなものなしに書くのが小説家なのかも知れない。

とにかく若い頃、一つのこと眞剣に取り組んでその奥義を極め、今は何か又ケガラ

みたいに住きている男。本当の力はまったく別のところに秘められていて何かのときにキラリと出て来る。全くカッコ良い。今現在の目先のことにアクセクしている中年男から見ると憧れすら感じる。

学生時代、学問に身を捧げ、経済学部教授にでもなろうか、と言う位のところまで行くとか、柔道やるなら学生選手権を取るせめて一歩手前まで行くとか、何かこうした突き詰めたもの、この分野なら誰にも負けない、と言えるものがない自分が淋しくてこうしたものには惹かれるのかもしれない。

(昭和五十五年十一月三十日)

57

「ホレーシヨ・ホーンフロアー物語」

田舎に住んでいると通勤時間が長いので、通勤途中で本が読めます。出来るだけ勉強になる本を、と努めはするのですが中々旨く行かず、このところ凝っているのがこのホーンフロアー・シリーズなのです。

ロンドンにいた頃、ペーパー・バックで発見して二冊ほど読んだのですが、中々面白

くて機会があつたらまた読んでみたいと思つていました。その後、英国へ行つて思い出すと本屋で探すのですが、大抵思い出すのが空港とか、駅での待ち時間のときが多く、あまり大きな店で探すわけではないので、聞いても、置いていない、と言われ続けていました。先日、田舎の家の近くの本屋でヒョイと見ると、ハヤカワ文庫でズラリと一〇冊揃つてはあります。翻訳本の方が望ましいのは当たり前。早速全部買つてきて頭から読んでいと言つ訳です。

いわゆる海洋もので、作者はセシル・スコット・フォレスターと言つ英国人。一九六五年に亡くなつていますから、左程古くはありませんが、物語の舞台はナポレオン戦争の頃。海軍の見習士官が色んな冒険と苦勞をしてドンドン出世し、遂には提督になり、貴族になると言つ冒険と成功の物語なのです。

面白いのはこのシリーズが時を追つて書かれたものではない、と言つこと。ある時点で実際の歴史の舞台に一人の人物を登場させ、その人間像を創り上げておいて、その後、時に合わせて昇進して行く過程を描き、今度は遡つて見習士官にしたり、その間を埋め

たりしているのです。エピソード風の構成にしてあって、これがこのシリーズを読み易くしているのですが、それでいて頭から時代を追って読んで行っても全く自然でオカシなところがなく話が繋がって行くのです。作家と言うのは素晴らしい能力を持っているものなんだな、と思います。

英国では大変に評判の、と言うより評判だった本のようで、読んだことのない人でも、ホレーシヨ・ホーンブローアーと言えば大抵知っているようです。全くのフィクショナルですから、勿論実在した人ではありませんが、周りに出てくる歴史上の人物や歴史の背景は本物です。当時、実在した大提督や将軍が出て来ます。こう言う人たちのことを知っていればもつと面白いでしょうし、歴史が好きで自国の歴史に誇りを持っている英国人に人気がある理由が良く判ります。英国のある人が、このホーンブローアーを実在した人物のモデルだ、と言う説を出したことからあるそうです。ですから、英国の本屋で探すときも、本の名前とか、著者の名前を言わなくても、ホーンブローアーのシリーズはないか、って聞くと、本屋の店員が、オッ、日本人も知っているのか、と意外そうで、

それでも嬉しそうな顔をしながら、残念だけど今売り切れているんだよ、とか、最近は何も置いていないんだよ、と言うのです。

私の好きな船と海の話、それも帆船の話です。ところが帆船なんてものにはおよそ知識がありませんから、特に原文で読むときなんかは苦労します。術語、専門用語がドンドン出て来ます。帆の名前や船の部分の名前なら絵でも見れば判りますが、操船上の用語、テクニクなんかは解説書を読んでも中々判りません。それでも面白いのです。

この主人公の良いところは、英雄であつて実は決してらしくないこと。見習下士官からの叩き上げで、金も家柄も門閥もなしに提督の位にまで登りつめるのですから、能力は大変なものなのですが、実に人間的なのです。海軍軍人の癖に船に弱くてすぐに船酔いを起こしたり、帆船に乗っているのに高いところに登るのが苦手だったり。自分の判断や行動を反省して、やたらと悔やんだり悩んだり、その辺が何か我々凡人に近くて親しみ易いのです。長い間の待命で岡暮らしをさせられ、待命中の給料では食つて行けないので、賭けトランプで生計を立ててみたり、やっと初めて小さな船の艦長に任命され、

張り切って乗り出したのは良いけれど、外海に出た途端、自分が船に弱かったことを思い出し、酔って苦しんだり。自分を思ってくれる下宿の娘さんの好意をハネつける勇氣がなくて心に染まぬ結婚をしてみましたり、妻にそのことを気取られないように苦勞したり。もう少し偉くなって少し慢心し、偶々子供が生まれると言うので岡の生活にかまけて艦をオロソカにし、それに氣付いて自責の念に驅られて殊更自分を酷い目に遭わせたり。ことに臨んで実は動揺し、どうしよう、と思っているのに部下に対してはオタオタせず貫禄を見せるにはどうしたら良いか悩んだり。部下を扱うテクニクを弄んでみたり、少し余裕が出てくると手柄とそれに見合う収入を計算したり。そうした人間味のあるエピソードをはさみながらの冒険談ですから、飽きずに読めるのです。

海軍魂というか、国に対する忠誠心、責任感は素晴らしいもので、この辺は日本の武士・軍人の精神構造に共通するものがあって、古い人間の私にはピッタリ来るのです。それでも果たさねばならない義務と、昇進とか実入りとかの打算との板ばさみなんかが出てくるのはいかにも人間臭くて面白いと思います。

てなわけで、毎日立ちん棒の一時半の通勤電車が楽しみな程で、速く終らないよう大事にユックリ読んだことでした。

運輸省が持っている訓練船の内二隻が帆船なのですが、五十五年前に出来た日本丸が昨年退役し、その保存場所を巡って各市、各港が熾烈な誘致合戦をやっていましたが、結局横浜市が誘致に成功しました。これを三菱重工の横浜の旧工場のドックで保存することになり、保存のための工事が必要になりましたが、この工事は落としてはならない、とここ一年間ずっと追いかけて来ました。これは首尾よく受注出来て、今工事の最中です。全部取ってやろうと思っていましたが、やはり市民感情に対する配慮とか、議会対策とか、先生方の動きとかが出てきて、一社ではまずい、と言うことになり石川島播磨重工と組んで、共同企業体と言う形にしています。この工事の先方の関係者が殆ど皆帆船の専門家達ですから、この本のお話を出すと話が良く合うのです。専門用語もこの人たちなら良く判るし、喜んで解説してくれます。逆にこんな話を雑談の中で持ち出

すことにより仕事をプロモートすることも出来るといっわけで、偶然とはいえ実益も兼ねることになりました。

諸兄も固い本ばかりでなく、偶には息抜きにこんな本を読んで見られてはいかがですか。
(昭和六十年二月二十四日)

伝記を読む

このところ何だか伝記ものについています。

今読んでいるのは、大森 実のシリーズもので「ザ・アメリカ」。全部で10巻とのことですが、まだ完結していないので出るのを追いかけて読んでいます。もう8巻目まで来ています。個人の伝記を中心に開拓期のアメリカを描いて行くもので、手法として興味があります。西部への道を探してシエラネバダ山脈の雪のために八甲田山並の大惨事を引き起こしたリード一家の悲劇を描きながら西部開拓の精神を書いた第一巻。サッター砦の狂気の將軍と一攫千金を求めるフォーティナイナーズを中心に1849年代

のカリフォルニアのゴールド・ラッシュを描いた第二巻。その他石油王ロックフェラー、鉄鋼王カーネギー、財閥モルガン、政商スタンフォード、銀行のジアニーニ、自動車王フォード、と時代は当然のことながら重なっていて、これらのエネルギーシユといつかアクの強いアメリカ人達の絡み合いが面白いのです。後はデュボンとヒューズだそうです。少し残念なのが大森実。リポーターとしては大宅壮一賞を貰ったほどの人なのですが、ストーリー・テラーとしては今一つの感じ、なんて生意気な感想を持ちながら次ぎを楽しみに読んでいます。

少し前に読んだアイアコツカの自伝も読み物としては面白かったけれど、やはり自分を自分で書くのは宣伝臭が強くなるし、特にこの人は自己顕示欲が強いので、あまり打たれるものがありませんでした。それより「その後のアイアコツカ」の方が第三者が書いているだけあって見方が冷静で、人が描けているように思いました。こんなにドギツイ人が間違つてアメリカの大統領になつたら、只でさえ自己中心主義傾向の強いアメリカが、益々その傾向を強め、日本なんか大変なことになるのではないかと思いまし

た。

上前淳一郎の「山より大きな猪」も面白かった。昭和三十年代前半の日本の高度成長に挑んだ男たち、池田勇人、松下幸之助、下村治等が生き生きと描かれています。田中角栄や大平正芳等も少し現れます。戦後の混乱期に所得倍増論を引っ提げて出現した池田勇人。あの時代にはこの人が必要だったのだな、と感じさせられます。下村治なんて今はあまりパツとしませんが、あの頃は神様の存在でしたな。

一番面白かったのが、ニクソンの「指導者とは」。これは面白い。未だ読んでいない人は是非一読を勧めます。アメリカの副大統領から大統領と言う長い政治家としてのキャリアーの中で、自ら接触した世界のリーダー達の素顔を描いています。さすが素晴らしい。ニクソンと言う人、末期がウォーターゲート事件で気の毒な幕切れだったけど、有能な人だ、とは思っていましたが、この本を読んで益々その感を深くしました。夫々のリーダーを見る眼、彼らから学んだこと、が興味深く書かれています。訳文ですから文章は良く判りませんが、描写が生き生きしていて文章家としても一流なのではないかと思ひ

ます。チャーチルもすごいけれど、日本の政治家はどうしてこう言う本が書けないのだろうか。圧巻はチャーチル。筆者も、われらの時代の最大の人物、と評していますが、この人のチャーチルに対する尊敬がヒシヒシと判るような文です。マッカーサーが単なる軍人ではなく、親父さんゆずりの東洋研究家で、昔から極東の重要性を信じ、一家言持っていたことはあまり知られていません。現在の日本の繁栄の基礎を作った戦後の統治というか指導は偶然ではなかったらしいのです。

この人は戦後の世界の歴史を造った指導者の殆んどに会っているのではないでしょう。我が耳にする夫々の国の指導者と言われる人の殆んどが出て来ます。本人も、スターリン以外には皆会った、と書いています。幸せな人といえるのでしょうか。チャーチルは勿論のこと、ドゴール、マッカーサーと吉田茂、アデナウアー、フルシチョフ、周恩来にはかなりの紙面を割いていて面白いのですが、この他にもスカルノ、ネール、メイア、ナセル、サダト、パレビ、リー・カン・ユー等にも少しずつ記述があり、これらが又キラリとっていて面白いのです。

指導者を偉大にするのは偉大な人物、偉大な国家、偉大な機会だ、と書いています。国家の危機とも思われる大事なときにピツタリの人が現れて偉大な仕事をする、これが本当に偉大な指導者。日本の明治維新でもそのために生れて来て、やるだけのことをやったら死んで行った坂本竜馬のような人がいます。やはりその人を生み出す機会と言ったのが大切なのだと思います。

(昭和六十一年十一月二十二日)

外国人作家

相変わらず読書は通勤電車の往復。遠いのが幸いして往復とも座れるのでユックリ本が読めます。なんせ片道一時間半、往復三時間。一年の内一カ月半電車に乗っているのですから、この時間を有効に使わないと皆さんに置いて行かれてしまう。ひと頃は割と為になりそうな本を読んできましたが、このところ軽いもの軽いものに変わって来ます。人間がナマケ者になって来たのでしょうか。まず、固い表紙の厚い本は持ち歩きに不便。第一高くて……。やはり文庫本になります。ですから少々時代遅れのもの。こ

れは我慢せねばなりません。それもあの通勤時間の苦痛を忘れさせてくれるのは、やはり軽くて面白いもの、と言つことになります。どういふ訳か、爽やかなはずの朝、途中で眠くなり、疲れてヘトヘトのはずの帰りの方がタツプリ読んでいます。重くて厚い本に挑戦するのは休みとか就寝前の床の中。今は「文芸春秋に見る日本史」ですが、中々進みません。このところどういふ訳か外国ものを手にすることが多くなっています。一冊一冊選ぶのが面倒なので、どうしても長編とか同じ作家のものを選ぶことになります。勉強を兼ねて原文で読めば良いのですが、怠け癖でオツクウになり訳文で読むことが多くなりますが、その中の幾つかをご紹介します。

一．アサー・ヘイリー

「ホテル」に始まって「大空港」「最後の診断」「自動車」「マネーチェンジヤーズ」「権力者たち」「エネルギー」から「ストロング・メディスン」まで、この人の作品は出版を追いかけて全部読んでいます。とにかく舞台の勉強が行き届いていて、深くて面

白い。一つの舞台だけのことを書くのではなくて、その度ごとに舞台を変えて来るのですが、良くあれだけの勉強が出来るものだと思うし、逆に新しい勉強が出来て、書いていても楽しいのではないかとすら思います。ですから読む方もその業界のことに詳しくなる。楽しみながら教えられている、という結果になるので好きな作家です。舞台を変えてその業界のことを詳しく描くと言う点では、山崎豊子もよく勉強している、と聞いたことがあります。

二・フレデリック・フォーサイス

この人の作品も今まで出版されたものは全部読んでいて、何か新しい作品が出ると見逃さず求めています。単行本の間は我慢していて文庫本になったら直ぐに買うことにしています。少々セコイけど・・・政治・戦争を中心にした冒険・スパイもの。良くこんなことを考えられる、と思うほど精緻な構成。伏線を一寸見逃すと後が分からなくなるような構成になっています。その上、世界を縦横に走り回る国際規模の話ですから、益々

面白い。よほど頭の良い人なんだと思います。それと世界中の土地が出てくるので、行ったことがある都市の話なんかが出てくると懐かしい。「ゴルゴ十三」も舞台が世界中に跨り、出てくる絵が正確なので、海外生活をした人が懐かしがって好んで読むと言われますが、これと似たような面があるのかも知れません。戦後のナチを書いた「オデッサ・ファイル」は面白そうなので訳文が出るのを待ち切れず原文で読みました。

三・セシル・スコット・フォレスタ

言わずと知れたホーンブローアー・シリーズの作者。前にもご紹介したように、このシリーズは勿論全部読んでいますが、この他にも色々な作品を残しています。新しいものを発見すると買ってくるのですが、あまり失望した憶えがありません。先日見つけた「アフリカの女王」(ハンフリー・ボガードとキャサリン・ヘップバーンの往年の映画で有名。先日日曜洋画劇場でやっていましたね)なんかも凄かった。アフリカの奥地の河を走っているボロ船を下流の湖まで持って来てドイツの軍艦に体当たりさせようと言う

ので、川を下る部分が殆んどなのですが、その苦勞を延々と描く。こうしたシツッコサは日本人には真似が出来ないのではないか、とすら思いました。最近読んだ「駆逐艦キーリング」にしても、五〇時間一睡もしない駆逐艦艦長の活躍を、こと細かに延々と追って行く。同じようなシツッコサを感じました。大西巨人の「神聖喜劇」なんかは軍隊生活の短い期間を念入りに、シツコク描いて四〇〇ページの単行本五冊にしています。この辺の執念は一寸似ている面があるのではないかと思います。

四・ジェフリー・アーチャー

英国の下院議員で、サツチャー政権の大臣にまで進んだけどスキャンダルで身を引いて小説を書いているという変り種。流石に政治がらみを題材にした時は迫力があります。「ケインとアベル」「ロスノフスキ家の娘」「大統領に知らせますか」の三作は一種の政治小説。抜群に頭脳明晰で有能な娘の生い立ちからアメリカの大統領になって行く話です。この手の題材しか書けないのか、と思っていたら「百万ドルを取り返せ」なんか全

く世界の違う経済もの。株の操作で取られた一〇〇万ドルを被害者の四人が協力して取り返そうとする話。結末に一寸無理が感じられたけれど、まずまずでした。

五・ シドニー・シエルドン

シドニー・シエルドンは天才作家、という触れ込み。アメリカでは大変な売れようで、書く本書く本大当たりとのこと。「ゲームの達人」の訳本が出版されましたが、この本も「こんな面白い本は初めて」という広告です。アメリカではベストセラーを続け、日本でも全国でベストセラー一位の書店が続出していると言つので読んで見ることにしました。確かに面白い。起こりえないような事件が次々に起こります。次に何が起こるかが楽しみになってドンドン読み進めます。小説と言つのは面白ければ良い、という説があります。その意味からすれば、この作者は一級品なのかも知れません。ところが訴えるものがないのです。思想とか教えられるものもありません。感動も少ない。何か事件の羅列と言つ感じなのです。こんな作品がベストセラーになっている様ではアメリカ

の読者のレベルも大したことないな、とすら思います。とかなんとか言いながら面白いことは面白い。考えているヒマがないから読むのは早いのです。「ゲームの達人」と「天使の怒り」は訳文で読みましたが、このところ原文で読むことになっていきます。「Windmills of the Gods」「The other side of midnight」「A stranger in the mirror」を済ませ、今「If tomorrow comes」を読んでいます。ペーパーバックですから安いし、厚そうに見えるけど書いてあることが易しいからサラサラ読めます。あと何も残らないから、バカバカしい本読んじやったな、と思うこともあるけど、通勤の時間潰しには最適みたいな気がします。少し買い溜めをしています。

(平成元年三月二十五日)

「虹の生涯」

大下弘の名前を私が初めて耳にしたのは、昭和二十三年頃のことだったと思います。終戦の年、二十年の五月に東京の代々木の家が戦災で焼けたので大村に疎開し、終戦後長崎に移ったのですが、長崎に移ってすぐの頃だったと記憶します。野球が流行ってい

て、私も野球少年の一人だったのですが、当時、川上哲治の赤バットが有名で、野球ファンは猫も杓子も赤バットのファンでした。皆が赤バットなら、こちらは青バットの天下にしよう、とかなり人為的に大下ファンを標榜することにしたのです。

当時は私も中々の野球気違いでした。大村にいた小学校低学年の頃から、お兄さん方に混じってやっていました。皆の嫌がるキャッチャーをやらされることが多かったのですが、借り物の革のミットは重くて支えるのに苦労しました。借り物の道具がある時はむしろ幸せで、借り物が無い時は、母が焼け残りのズックの布で作ったグラブでした。その内に、グラブは自分で作るようになりました。ボールも軟球でゴム毬なのですが、ゴムの質が悪いのか直ぐに割れてしまうので、その内に自分で作ることを覚えました。剣玉の玉かなんかを芯にします。その周りを綿でくるみ、凧糸でグルグル巻きにして中味を作り、ズックの布を瓢箪型に切り抜いて、これを二枚合わせて作るのです。円周率と縫い代を考えると、ボールの大きさが計算できます。言わば硬球ですから当ると痛かったです。突き指もずい分しました。革製のグラブを父に初めて買って貰ったときの嬉しさ

は、今でも忘れられません。

野球ゲームも色々ありました。大抵は雑誌の付録に付いて来るものでしたが、その内にこれも自分で作るようになりました。サイコロの目で遊べるゲームを作るのです。ストライク・ボールに始まって、打つ・見送る・空振り。打球の方向、ゴロかフライか。取ったかエラーか。細かくルールを作るのですが、サイコロが手に入らないので、六角形の鉛筆にナイフで刻み目を入れて、これがサイコロの代わりでした。友達を連れて来てやることもあるし、相手がいない時は一人でも楽しめませう。打順を作り、スコア・カードをつけて記録に取ったりしていました。実際にボールが転がってくる野球盤が出て来た時は感激したものです。ゴムを利用したバネでバットを動かして、パチンコ玉みたいなボールを弾き飛ばす仕組みになっていました。でもこんな凄いゲームを手に入れたのは、大分後になってからのことだったと記憶します。

大下弘は明治大学から学徒出陣で航空隊に入り、ポツダム中尉になって戻って来ましたが、明治を中退し、昭和二十一年、戦後直ぐ出来たプロ野球のセネターズに入団しま

した。ボールを遠くに飛ばすことにかけては天才的なものを持っていたらしくて、ホームラン・バッターとして華やかにデビューしています。「大空に打球の虹を描く大下弘」と、この美しいホームランを表現したのは野球評論家の大和球士だったそうです。笑顔の良い清潔な感じのする好青年の雰囲気を持っていて、子供好きで少年野球に力を入れている、と言うことでも人気がありました。派手なホームランを打つと言うことだけではなく、華やかな明るい雰囲気を持ち主だったと言うことで、フジヤマの飛び魚と呼ばれた古橋広之進や天才美空ひばり等と並んで、戦後の落ち込んだ日本人の心に希望の灯を与える力を持った人の一人でした。私の大下はセネターズから名前の変わった東急フライヤーズの天下でしたから、私は必然的に東急ファンと言うことになりました。当時の東急には今参議院議員になっている白木義一郎とか、黒尾重明とか言うピッチャーがいましたし、飯島滋弥と言う親分肌の名内野手がいましたが、弱くていつも最下位辺りをウロウロしているチームでした。私は東急が勝っても負けても大下が打つと喜んでいゝるささやかなファンでした。大下は昭和二十七年に西鉄に移ったので、私は今度は西鉄

のファンになりました。大下の活躍はこちらの印象の方が強いのでしょうか。智将と言われた三原監督の下に、中西太、豊田泰光、稲尾和久、高倉照幸と言った荒くれ男達がいる、そのリーダー格が大下でした。野武士集団と呼ばれていましたが、この辺の印象は大人のプロの集まり、と言うことです。試合の前日に徹夜でマージャンをして、真っ赤な目で連続試合安打記録を作ったとか、稲尾が一寸慢心して、自分の力で勝つんだ、なんて言ったら、サードの中西とショートの大田が三遊間に飛んでくる打球を取ってくれなくて、試合中に稲尾に謝らせ、その後二人でチャンと打って、稲尾に勝たせたとか、優勝祝賀会でベロベロで八チャメチャになってる写真を撮られて雑誌に掲載されて問題になったとか。およそ無茶苦茶な集団でしたが、仕事以外のところでは何をやっていても、キツチリ仕事をすれば良いんだ、と言う三原の考え方が理解できる大人の集団ではなかったかと思えます。管理野球なんてものももて囃されたことがありませんが、管理を受けなければ仕事が出来ない、なんて、およそプロとは言えない。ガキではないんだから、自分でシツカリ自分を管理して仕事をする。これが本当のプロだと思うので

す。この頃の天下はソロソロ落ち目で打順も五番。脇役でしたが親分としての貫禄でした。この野武士集団が四連覇の偉業を成し遂げたのでした。

昭和三十四年に引退後、何処かの監督をやったと思いますが、上手いかなかったようです。選手を自由放任にし過ぎた、と言うことではなかったか、と思います。自分が大人のプロだから、誰でもそうだ、と思って放し飼いにしたのでしょうが、管理されなければ自分を律することが出来ないガキ共がプロ面をする時代になっていったということなのでしょう。程度の問題はありますが、私は管理・管理で縛るよりも、自分で自分を律して結果を出せ、と言うやり方の方が好きです。付き合う相手を大人として扱いたい。例えばそれが自分の子供でも小さい時から大人として扱ってきました。一人前の大人として扱われれば、それだけの意識を持つようになる。まして会社の仕事の上においておや。幾つになっても自分の行動に責任の持てない、管理を受けないと甘ったれて勝手な行動をし始めるガキがいるものですが、そういう輩とは本当に付き合いたくないと思います。ガキとはガキとの付き合い方がある。呶鳴りつけて叱りつけて付き合い

が、長続きはしませんね。大人の集団を育てて行けば組織としても良い仕事が出来ると思つたのです。そういう意味では、私が作り上げた今のチームは若いけれど大人の良い集団になっています。・・（閑話休題）

この程出版された辺見じゅんの「虹の生涯」は大下の伝記です。四〇〇頁の大作なので、この忙しい時期に果たして読めるだろうか、と一寸迷いましたが、買って来て寝る前に少しずつ読みました。「虹」は大和球士の評がそのまま使われたでしょう。華やかな雰囲気を表す良い表題をつけたものだと思います。打撃に関しては大変な努力家であつた上に、大変な天才だつたことが判りますが、当時少年の私には、判らなかつた部分がい分あつたようです。まず私生活の方は、必ずしも清潔で爽やかな好青年の印象とは合致していません。家庭的には恵まれた方ではなく、女性関係もむしるルーズだつたことが判ります。西鉄に移る時も、何かゴタゴタしていたようでしたが、この本を読んだ限りではあまり明朗なやり方ではなかつたように思えます。人が良いといわれる人であり勝ちのやさしさとか優柔不断みたいなものが裏目に出ているのでは

ないかと思われませう。

晩年が不遇だったことは聞いていました。昭和三十五年に脳血栓で半身不随になり、昭和五十四年に五十六歳で亡くなっていますが、睡眠薬を飲んだので自殺らしいのです。当時、自殺の報道はなかったように思いますが、これだけの天才で、多くの人に愛された人が、こんな不幸な最期を遂げるなんて判らないものです、大下の記録は生涯ホームラン数二〇一本、終身打率が三割三厘ですから、飛び抜けて良いとはいえませぬ。でも「日本のプロ野球が今の繁栄を迎えるためには、二人の背番号三番が必要だった」と辺見じゅんは言います。大下弘と長嶋茂雄。「観客に感動を与えるたたずまいがあった。プレーをしている時のみならず、静止している時ですら、その姿は美しかった」と表現しています。そしてこの本が、三原の次の言葉で締めくくられているのが嬉しい。

曰く

「日本の野球の打撃人を五人上げるとすれば、川上、大下、中西、長嶋、王。

三人にしぼるとすれば、大下、中西、長嶋。

そして、たった一人を選ぶとすれば、大下 弘」

(平成四年六月一日)

「サッチャー回顧録」

アイアンレディの異名を取り、十五年間保守党の党首を勤め、十一年半首相として英国をリードしたマーガレット・サッチャー女史の回顧録です。保守党党首になった時の話は、私のロンドン駐在中のロンドン便りの中でご紹介しましたね。(マギー旋風、一九七五年四月号)。首相指名を受けた一九七九年五月から保守党内部の内輪もめの結果、一九〇年十一月、不本意な涙の辞任をするまで、が克明に記載されています。任期中、日記はつけていなかったと言いますから、公式の記録と記憶、報道記事なんかを元に纏めたものなのでしょう。

労働党の敗北が序章に記され、本章は総選挙で保守党が勝利する瞬間から始まります。早速女王に拝謁して組閣の命を受け、最初の組閣に入ります。家庭の主婦との両立、夫君デニス氏の協力の話なんか、極く普通の主婦の立場から語られて行きます。普通の

お母さんがとんでもないことになってしまつて、マア大変、と言つてゐるような雰囲気も感じられて、微笑ましい感じがする部分もあります。

すぐにフォークランド紛争が起こります。表の動きと裏での動きが目を追つて生々しく描き出されています。これに当つた強い姿勢がアイアンレディの異名の発祥になつたのでしよう。「外に敵を作つて、内を固める」総合弁証法の外部否定に当るのでしようが、サッチャーさんにとつて、フォークランド紛争は自分の強さを示す渡りに船の好機だつたのではないのでしょうか。第二次世界大戦の初期、日本がアメリカの挑発に負けて、真珠湾攻撃に走つた時、時の英国首相のチャーチルが、これで勝つた、と大喜びした話があります。ドイツとの戦争で苦戦が続き、アメリカに手伝つて貰おうと散々苦勞してゐるところへ、日本がこんな動きをしてくれたので、これでアメリカが立ち上がつてくれる、と言つ確信が持てたと言つことでしたが、これと似たようなものかも知れません。それにしても、理不尽なことは許さない、と言つ女史の断固たる態度は見事なものです。この辺は気持が良くくらいハッキリしています。アイルランドのテロと戦つ姿勢も、決

して許さない、絶対に負けないと言う決意がシッカリしています。イランのクエート侵攻に対する態度も同じで、最初から最後まで、世界中のリーダーの中でも最強硬派だったと言っても言い過ぎではないでしょう。辞任したのが、湾岸戦争勝利の直前なのですが、自分がもう暫くものが言える立場にいたら、フセインが立ち直れないようにしてやったのに、なんて言っているのが面白い。自由主義経済を信奉し、共産主義嫌いが徹底しています。だからゴルバチョフ首相には、早くから共感するものを持ち、高く評価しています。共産主義を倒すと言う共通の目的から、エリツインには最初から期待している向きが感じられます。ゴルバチョフには特別の思いがあつたようで、後半、改革が上手く行かなくなつてからも、評価は変わらない、との見方をしています。共産主義を崩壊させた第一の功労者として、レーガン大統領が上げられ、同盟者としてシュミット、コール、ミッテランの名前を上げています。口に出してはいませんが、勿論、自分が一番の功労者、という意識があります。

二〇〇万人に上っていた失業者を減らし、インフレを押さえるために、政府の経済へ

の介入を減らして、産業を活性化しようとする施策の進め方も興味がありました。組合との戦いが物凄い。絶対に妥協せず、世論を味方につけながら、鉄鋼スト、ブリティッシュ・レイランド、炭鉱ストと次々と負かして行く過程は、読んでいて気持が良いほどです。これもフォークランド紛争に対する不退転の決意を国民が高く評価し、リーダーに対する信頼が生まれ、経済政策への取り組みに当たっても、このリーダーに付いて行けば大丈夫、という世論が形成されたのが理由ではないかと思えます。

英国のEC加盟について、自国の国益を守るうとする、欧州各国との「交渉」と言うより「戦い」の経緯が面白い。一国を預かる人の責任と努力が良く判ります。「自由で進取の気性に富んだイギリスのような国が、心地良く繁栄できるようなECに（なつて貰つて、こんなECになら）加盟したい」なんて、何と言う自信に満ちた気持ち良い愛国心でしょうか。これがつい先頃まで英国病を患っていた同じ英国の宰相の言葉だなんて、信じられない気すらするのです。

各国首脳の人物評が、そこここに出て来ます。カーター大統領については良い人だけ

れど能力がない、との評価に対し、レーガン大統領に対する評価が特に高いのが判りません。何かと言うと電話で連絡を取り合って、協力して世界を動かして行った過程が描かれています。ブッシュ（シニア）大統領については最初の評価はさして高くはないのですが、イラクのクエート侵攻に対する対応辺りから評価が変わっているように思います。フランスのジスカールデスタン大統領とは波長が合わなかった様子で、親しみが持てない、貴族の物腰で考え方もエリートのテクノクラートだ、と酷評しています。同じフランスでもミツテラン大統領への評価は高いのです。一九七九年の東京サミットでの大平首相の手際については評価が低かったようです。これに比較して中曽根首相の方は、鋭い国際感覚の持ち主だ、とか、一九八六年の東京サミットは前回のものより良かったと言った高い評価が与えられています。竹下氏は日本の政治が判り難いことの例として出て来ます。

自分の閣僚個々人の批判、能力評価が色々な形で出て来ます。この部分は外国人の私にはむしろ分からないのですが、英国人にとっては身近で面白い読み物かも知れません。

後継者のジョン・メジャー首相については、どうやら能力よりも、あまり害のない人物と云うことで選んだ節が見えます。最後の頃は内紛も絡んでくるので、グチや誹謗めいたものも出て来ます。ジェフリー・ハウとかナイジェル・ローソンとか、聞いたことのある人の名前も出て来ますが、いずれにしても現存の人です。本人にとっては迷惑な面もあるのではないでしょうか。ここまで言つて良いものか、一面では勇敢だと思いましたが、逆にそうした他人に対する配慮に欠ける人なのだろうか、とも思いました。

凄いと思つたのが、フランス革命を堂々と批判している点です。批判と云うのは言い過ぎかも知れませんが、評価していいと言つことを言つてはいるのです。英国の名譽革命の方が格段に良いと云うのです。人の国の歴史を評価するのは勇気がいることだと思ひます。ましてやプライドの高いフランス人が、自由主義の發祥として誇りにしているフランス革命を批判するのです。日本の政治家にこんなことが出来るだろうか。南京虐殺辺りでオタオタしている。虐殺された人の数が三〇万人だったとか三〇〇〇人だったとか。人が一人でも死ぬと言つことは大変なことであるには違ひないことだけど、何と言

つても戦争中の一事件に過ぎません。これを認めるか認めないかが国の尊厳を左右することなのか。認めなければ国同士の付き合いが出来ない、なんてオカシナ議論だと思います。脅しに乗って右往左往しているような気がしてなりません。政府としてももっと毅然とした態度が取れないものでしょうか。もっとも、永田前法務大臣があの場合であんな発言をしたのが利口なことだったかどうかについては、かなり疑問が残ります。確固たる信念があつて、ああいう公の立場に立つたら、この発言をしてやろう、と満を持していたとしての発言だとしたら、一つの考え方だったかも知れません。けれども、言つて直ぐ取り消して辞任するなんて、信念があつての発言だったとはとても思えません。取り消すくらいなら最初から言わなければ良い。お蔭でこの問題がまた浮き彫りになり、逆のコミットを強くしないと収まらないような羽目になる。迷惑だけが残つて何をしてくれたのか。(閑話休題)

フランス革命を否定すると言うことは、歴史の一事件を否定するのは訳が違います。フランスと言う国の根源を評価しないと云っているのではないのでしょうか。もっと凄

と思うのは、それでいて英国とフランスの関係が決定的に悪くなったと言う話は聞きませんし（両国は元々歴史的にも仲の良い国同士ではありませんが）、サッチャーさんとミッテランさんの仲が悪くなった訳でもないと言うこと。お互いを尊重するいわゆる大人の付き合いが出来ているのだと思います。ノルマンディ作戦五十周年の行事に当って、朝日新聞で良い記事を読みました。「英女王、米大統領や仏大統領は、当時共通の敵に対して戦った『共労』の記念として集まった。敵方のドイツは、当然記念式典には招かれなかったけれど、決して仲間はずれではない。それは戦後、色んな形で『共労』の努力をして来ているからだ。それに反して日本はどうだろう」と言う見方です。フランス革命を否定すると言うことは、中国の例で言えば、孫文とか毛沢東を否定することになるのではないでしょうか。日本の責任ある立場の人がこんなことを言ったらどんなことになるのか、想像も出来ませんね。別に人の国の歴史を批判することが良いとは言わなけれど、日本の場合、世界の政治の場ではまだまだ小国で、大人の扱いをされていないのではないかとすら思いました。

日本も明治維新と言う世界に誇れる革命の歴史を持っています。外国の干渉を排除して、自分の力で（外圧が契機になったと言うか、外圧を利用した革命だった点なんか、今の日本を彷彿させるのが面白いのですが）殆んど無血で自由主義革命をなしたとげた。私はもっと世界に誇って良いことだと思っています。南京虐殺辺りでオタオタしないで、自分の国の歴史を誇り高らかに堂々と紹介してくれる政治家がいないものかしら。

（平成六年七月一日）

「英国史」

アンドレ・モーロアと言うフランス人の書いたこの「英国史」は、昔から私の憧れの本でした。何故憧れの本なのか、それはただ単に、昔、父が熱心に読んでいたから、と言うだけのことなのです。私の記憶では、父がこの本を手に入っていたのは、床の中だったことが多いのですが、それはそれは熱心に読んでいたものです。床に入ってから、遅くまで読むものですから、母が迷惑がって文句を言っていたのまで覚えていません。戦後

間もない頃のことで、父も文字に飢えていたと言つこともあつたのではないでしょうか。白っぽい表紙で、粗末な紙質の、今思えば安っぽい装丁の単行本が、父の寢床の横の床の間に読みさして置いてあつたのを思い出します。父も本が好きで、自分でも買ったたり、借りたりでずい分読んでいましたから、私もおこぼれで大分読みました。中学の頃、話題になつていた「アスピリン・エイジ」なんて本は、何か政治を難しく風刺してみたいな内容だつたと思いますが、全く理解が出来ませんでした。ただ、父が誰かに、家の息子は「アスピリン・エイジ」を読んでいるんだ、なんて自慢気に話しているのを聞いて、何となく偉くなつたような気になつて、判らないなりに完読した覚えがあるのです。父はひと頃、クローニンと言つ作家に凝つて、探して来ては読んでいました。これは小説ですから読み易くて、私もお下がりやを殆んど読んだと思います。「英国史」はどういう訳か、読みませんでした。父も借りてきたもので、直ぐに返してしまつたからではないかと思ひます。当時の私には難し過ぎた、と言つことだつたのかも知れませんが、多分、小学校の高学年か、中学の低学年の頃のことですから……。父が亡くなつてから父の本

棚を見ていたら、文庫本の下巻だけ発見したので、コッソリ持って来て、私の本棚の一角に収めたことがありますから、やはり父は最初は借りて読んで、後で文庫本になった時に自分で買ったものなのでしょう。いずれにしてもアンドレ・モーローアの「英国史」と言う本の名前は、何故かシツカリ私の頭の中に刻み込まれていて、いつかは読んでやろう、と思っていたのです。

大学在学中は、お勉強には熱心でなく、歴史に熱心になった記憶がありません。むしろ物理学とか天文学の方面に関心があったように思います。ガモフと言う学者の「不思議の国のトムキンズ」に始まるトムキンズ・シリーズは面白くて良く読みました。これは今も読み返してみたいシリーズです。ですから、大学時代は熱を入れて本気で「英国史」を探した覚えがないのですが、社会人になってからは本屋に行くと、何となくこの本を探していたようです。探し当てることが出来なかったのは、絶版になっていたのでしょうか。あまり人気がなかった本だったのかも知れませんが、古本屋へでも行けばあったのでしょうか。ロンドンに駐在する直前に、英国の歴史の勉強位はしなければ、と歴

史の本を探したのですが、何故か適当なものが見つかりませんでした。アンドレ・モーロア、アンドレ・モーロアと一番熱心に探していたのはこの頃だったかも知れません。結局、出発前には探し出すことが出来ず、ロンドンに駐在中、今度は原本を探してやろうと、本屋へ行って、思い出すと店の人に尋ねて回りました。「セシル・スコット・フォレストターの『ホレーシヨ・ホンブローアのシリーズ』を探しているんだけど」と言うと、大抵の本屋は、日本人がこのシリーズのことを知っていること自体が嬉しい、と言った雰囲気です。「残念だけど、今は置いていないんだよ」と、誠に好意的な反応を示してくれたのですが、この本の場合は「アンドレ・マルローなら知っているけど、アンドレ・モーロアなんて知らない」と言つのが反応の大半でした。名前のスペルも知らなかったし、モーロアなんて発音が悪いのかな、と思っていたのですが、実は当時は、この著者がフランス人だと言うことも知らなかったため、英語で原本があると信じていたのです。ロンドンの本屋でフランスの本を探しても無理だったと言つて訳です。無理に探し出してもらったらフランス語の原本だった、なんてことにならなくて良かった、と言う

ことになるのでしょうか。英語への翻訳本も勿論あるようですが。

先頃、新潮文庫が復刊本を出すと言うので広告を見ていたら、第一回の配本にこの本が入っているではありませんか。シリーズで復刊される第一回分の十八冊の中に含まれていると言うことは、この本が当時、かなり話題になった本なのか、評判の高かった本だという証拠と言えるのではないのでしょうか。この辺の田舎の本屋では中々手に入らないと思って、電話注文で手に入れました。原著が上梓されたのが一九三七年と言いますから、偶然私の生れた年。最初の日本語への翻訳本が出たのが二年後の昭和十四年と言います。戦時中の発売停止の期間を経て、戦後再版されたと書いてあります。文庫本になったのが、昭和三十三年のことだそうです。こう言う歴史を知ってから思い出してみると、父が読んでいたのは、戦後再版された単行本だったと思われれます。私が手に入れた復刊版は、文庫本で上下二冊です。

さて、内容ですが、英国の地理的条件に始まり、ストーンヘンジに残されている紀元前二〇〇〇年頃の巨石文化の昔から、ケルト人の入植、ローマ人の侵略、ノルマン人の

征服の歴史辺り、種々の王朝、エリザベス一世やビクトリア女王を代表とする名君や、クロムウエル、ピット、グラッドストーンなどの宰相の話を経て、第一次大戦の終了まで、正にギツシリと言う感じで綴ってあります。海軍大臣時代のウインストン・チャーチルがチラリと出てくる辺りまでです。最後の話題が、シン普森夫人との結婚を選んで王位を捨てたエドワード八世の話なのが面白い。決して読み易い本ではありません。むしる箇条書きの記述に近いので、その時代のことを深く理解しながら読むと、もっと興味深く読めると言う感じの本です。一番気に入ったのが、最後の部分。この人がフランス人には珍しく、英国人が好きで、その資質を尊敬している点でした。多くのフランス人は英国人が嫌いですから。「イギリスの歴史は、人類の最も顕著な成功の一つを語っている」と、最高の評価をしています。長い歴史を通じて、英国人が多数の決定には規律正しく従う習慣を持つていること、表面的には対立しても、根深い拳国一致の精神を持ち続けていることにも評価を与えています。そして「イギリス国民の力は、粘り強い、自信のある、親切な、その鍛えられた性格の中に潜んでいる」と言う結びになって

います。当時の英国はアメリカが出てくる前の、言わば超大国だった訳ですが、その国力の源泉が、当時英国が持っていたと思われる圧倒的な軍事力とか政治力にあると言うよりも、一人一人の英国人が持っている国民性にある、と評価した辺りが立派だな、と思うのです。私も英国人を大人の民族として尊敬している人間の一人ですが、この大人の民族の性格が長い歴史を通じて作られて来たものだ、という結論に、我が意を得たり、という感じがしました。

この本は一回位読んでも、理解出来るものではありません。長く手許に置いて、何度度も読み返したいと思っています。

(平成六年十一月一日)

渡部 昇一

渡部昇一と言う人は、上智大学を出て、ドイツや英国で学び、母校の上智大学の教授として英語学や言語学を教えている、いわば言語学の先生なのですが、この人の歴史論が面白くて、少し読んでみました。皆さんはどうだか知りませんが、私は学校で昭和史、

もつと言えれば明治維新後の日本の歴史を習った覚えがありません。古い時代のごとは詳しくやるのだけれど、中学でも高校でもこの辺になると尻切れトンボになってしまつて、先生から話を聞いた覚えがないのです。受験のための歴史の勉強だから仕方がないのかな、と単純に思ったこともありましたが、この時代については歴史としての評価が固まつていない、と言うことだつたのではなかつたか、と気が付きました。日教組系の先生としては、教え難い箇所だつた所為かも知れません。

明治維新に興味を持ち、その後の明治から昭和にかけての歴史を少し齧つて見て、私達は日本民族というものにもつと誇りを持つて良いのではないか、と思うのです。戦後の所謂進歩的文化人と称せられる人たちの日本人を卑屈にさせるような主張と、それを煽り立てるマスコミ(「自虐が売り物のジャーナリズム」と表現する人がいました)のあり方に反発を感じていました。最近の懺悔外交の姿勢を見ると、日本は未来永劫にわたつて世界中にお詫びを言い続けなければならないことになりそう。お詫び行脚に出かけた村山首相が、マハティールさんに「今頃になつても謝つて歩いてゐるなんて才

カシイ。日本に対して今更戦争賠償を求めるようなことは、わがマレーシア国民にはさせません。過去の話はもうウンザリだ。過去の謝罪よりも、将来のことを話し合おう」なんて言われたりして、ミットモナイ話。例の「在日フランス人の目」のポール・ボネさんも「このような外交のパターンは、何処かで断ち切らないと将来に禍根を残す」と案じています。「二十世紀前半に存在した日本人が諸外国に非道な行為を行ったと言う、虚実がないまぜになつた歴史観が定着すると、後に続く世代は、日本という国に誇りが持てなくなつてしまふだろう」と心配してくれているのです。「戦争において、当事国97の一方が全くの正義で、他方が悪と決め付けるほど愚かなことはない」と言い、「フランスの英雄は未だにナポレオンであり、ナポレオンの戦争責任をフランス人が謝罪した話なんて聞いたことがない」と言っています。日本人は過去にそんなに悪いことをして来たのだろうか。そんなに性悪な民族なのだろうか。そんな疑問を解明するヒントを与えてくれたのが渡部昇一史観なのです。

言語学者が何故歴史の本を書くようになったのだろうか、と思いますが、昭和六十二

年に書かれた「アングロサクソンと日本人」(これは本当に面白い本です。一読を勧めます)を読むと、彼の歴史への興味が言語の歴史から来ていることが判り、成る程と思えるのです。四十八年の「古代編」に始まる「日本史から見た日本人」シリーズになると、関西大学名誉教授で評論家の谷沢永一に「頼山陽の『日本外史』に並ぶ歴史に残る史論」と言わせています。最近話題になっている「かくて歴史は始まる」や「かくて昭和史は甦る」なんかになると、完全に一つの渡部昇一史観が出来ていて、その切れ味が鋭くて、息もつかずに読める感じの歴史書になっています。これが最近の「田中真紀子 98 総理大臣待望論」や船井幸男との共著による「日本再生」になるとオカルト史観が現代に適用され、「田中角栄の怨念」なんてものが出て来たりして、付いて行き難くなるのですけど。ごく最近では、社会党の出した「不戦決議」について、こんな「常道を外れた」決議案なんて成立させるべきではない、とハッキリ主張しています。社会党嫌いは徹底しているようで、色んなところで痛烈な社会党批判が出て来て、その辺も私の考えとウマが合う感じがするでしょう。お詫び行脚に出ている土井衆議院議長や村山首相

のことを国賊呼ばわりしています。国賊なんて言葉には久し振りに接しましたが、彼の主張を聞いてみると、成る程と思えてくるのです。

日本が大東亜戦争（彼はこの戦争を敢えて大東亜戦争と呼びます。少なくとも太平洋戦争ではない、と主張しています）に突入せざるを得なかった一番の遠因は、明治憲法の不備にあった、と言います。明治憲法には内閣総理大臣の規定がなかったのだそうです。国務大臣は皆同列で天皇を輔弼（ほひつ）することになっていますが、総理大臣の存在は規定されておらず、これでは首相が陸軍大臣をpushさえられなくても仕方がありません。徳川幕府から天皇に政権を返上させたから、と言うことで、天皇親政が強く打ち出された結果こんなことになったのではないのでしょうか。明治憲法が作られた当時の指導者、つまり元老たちが生きている間は、憲法制定時の精神が生かされ、何ら不都合はなかったそうですが、大正も末期になって、伊藤博文や山県有朋と言った元老達が段々にいなくなると、この不備が表面化して来たと言います。もっとも「統帥権の干犯」なんて、軍の独走を許すような憲法の解釈は、犬養毅とか鳩山一郎辺りが政府攻撃のため

の道具として考え出したものだと言いますから、この人達の罪も大きいのかも知れませんが。そして、戦争に追い込まれた直接の原因として、第一にアメリカの日系移民排斥、二番目にこれもアメリカのホーリイ・スムート法と言う保護貿易法。それとシナ大陸での排日・侮日運動（これも直接間接にアメリカが糸を引いたものと言われます）の三つが上げられています。憲法の不備は自分の所為としても、直接の外的原因は他の国々にも責任があつたと主張しているのです。特にアメリカの挑発が大きかつたと見ているように思われます。

経済力に大差のある戦争でしたから、敗戦は当然の帰結として、敗者の悲劇のもとになつたのは、極東軍事裁判にあつたと言います。近代戦争の歴史の中で、勝者が正義の名のもとに敗者を裁いた例はなかつたが、この風潮は第一次世界大戦で負けたドイツが悪者扱いにされたことに始まる、と言っています。勝者が敗者を裁くということは復讐を正当化することに他ならない。これでは常に勝つた方が正しいと言う事になり宗教戦争と同じになる。裁判を指示したマッカーサーも帰国後、公式の場で「日本がこの戦争

に突入したのは、おおむね自衛のためであった」と述べ、「東京裁判をやらせたのは間違っていた」と述べたそうですが、裁判は終わってしまっている。この裁判が行われたお蔭で、日本は犯罪国家としての烙印を押され、戦前の日本の国際的行為が総て悪行だった、との印象を内外に与えてしまったのです。その上、どういう訳か、日本国内にもこの史観を支持する左翼勢力や所謂進歩的文化人がいて、「日本は悪い国だ。日本人は性悪民族なんだ」と鬼の首でも取ったように騒ぎ立てる理由を与える結果になりました。南京大虐殺については、この裁判の中で突然出てきたものですが、これは全く事実に対する。物理的にもあり得ないことだ、との考え方を示しています。

この辺をハッキリさせておかないと、日本は未来永劫に犯罪国家の汚名を着せられ、日本人は極悪非道の人種であるとの印象を世界中の人に与えたままになる。日本の将来のためにならない。お詫びなんかすればするほど、その印象を強める結果になると思うのです。

先上げた谷沢永一という人は「こんな日本に誰がした」と言う本で進歩的文化人を

痛烈に糾弾し、その代表格として大江健三郎を徹底的にやっつけ、自分の国を愛さない、卑しい進歩的文化人」として厳しく断罪している人で、少しエキセントリックな部分もあるけど、実に痛快で賛成できる部分が多いのですが、この人が、この渡部昇一を評してこう言っています。曰く

「昭和三十年代からのわが国の論壇は、いわゆる左翼の暗黒史観、罪悪史観が跳梁しておりました。それらの歴史観に敢然として戦いを挑み、それを遂に今日のように克服することに力のあつた二人の日本人がおります。

我々に初めて日本民族の、その輝かしい伝統を再認識するその手掛かりを与えてくれたのは、一人は小説においての司馬良太郎、もう一人は論説においての渡部昇一、このお二人ではなかったか、とそう私は考えております。」

この評価を読んで、元々司馬遼太郎のファンだった私が、渡部昇一のファンの仲間入りをしたのはご理解頂けるのではないかと思えます。少々国粹主義にかぶれて来たのだろうか。でも、日本と日本人が好きで、自分の国に誇りを持ちたいと考える愛国主義者

の程度なら、許して頂けると思うのですが。

(平成七年十月一日)

「国民の歴史」

四、五年前、西尾幹二著の表記の分厚い本が本屋に平積みされた時、これは絶対に読んでみたい本だと思いました。西尾幹二と言えば、本職はドイツ哲学の学者で、ご存知「新しい歴史教科書を作る会」の会長ですが、この本が出た時はまだあれほどの騒ぎにはなっていないませんでした。その少し前に文芸春秋で「ここまで来たか歴史教科書

ついに日露戦争前の日本も悪者になってしまった」なる一文を読んで共鳴し、その後この人が書いた「人生の価値について」とか「異なる悲劇 日本とドイツ」等を読んで私の感覚に合うものを感じていたからでしょう。ところがこの本は七七〇ページと言う大変なボリュームの本だし、一九〇〇円と高額でもあるので少し逡巡し、その内に文庫本になるだろうから、そしたら買おう、と待っていたのです。それでもそれだけ厚くて固そうな本なのに、その当時にはベストセラーの一位になったりしていましたから、日

本人の読書に対する姿勢もまだ捨てたものではないな、と変な感心をしたりしていました。ところが中々文庫本にならない。単行本が平積みで本屋の店頭に並んでいる間は文庫本にはならないのでしょうか。最近、田舎のこの近くに大きな古本屋が出来たので、何気なく行ってみたら、漫画主体の古本に混じってこの本が並んであるではありませんか。値段は一〇〇〇円。大して安い買い物ではないけど、何だか得をしたみたいなきなになって買ってきました。

この著書の中で著者が一番強調したかったのは、これまでの日本の歴史は外国から見た目で書かれていた。日本には立派な歴史がある。日本人は自分の国の歴史にもつと誇りを持つべきだ。日本の歴史は日本人自身の手で書き換えねばならない、ということではないか、と思います。自分は歴史の専門家ではない、と言いながら、専門家の書いた歴史に相当痛烈な批判を加えています、どうやらこれは「戦後の歴史学者」に対する批判と思われます。

まず「戦後の歴史学者の大部分は、日本の歴史を、中国を先進文明とした指標の中で組み立て、日本を中国文化圏の一部と見なして来ているが、これは全くの間違いだ。日本には昔から独自の文明が存在していたのだ」と言う事を主張しています。『間違いの始まりは、二世紀頃に中国で書かれた魏志倭人伝の中に「倭」と言うことで日本が登場するので、日本の歴史はここから始まった、という見方をされていることにある。文字に書かれた歴史の中に日本が登場するのはこれが初めてではあるけれど、歴史と言うものは文字に書かれたものばかりではない。紀元前一万年前後から始まった縄文時代の昔から日本には独自の歴史があつた。独自の言語もあつた。文字と言うのは言語を伝達する手段には違いないけれども、文字がなかったからと言って言語がなかった訳ではない。ましてや歴史とか文化と言う人間の行為がなかった訳ではない』と言う訳です。(とは言うものの、歴史にとって文字の存在は大きいと思います。時間が出来たら読んでやるう、と前々から塩野七生の「ローマ人の物語」を買ひ込んでいましたが、ようやくボチボチ読み始めています。紀元前三世紀に文字で書かれた歴史書が現存しています。日本

では弥生式土器の時代。ローマ誕生の紀元前九世紀頃のことから詳しく記述されていますが、この辺は伝承によるものなのでしょう。・・・閑話休題)

第一、文字にしたって中国の文字＝漢字、を取り入れてはいるけれど使い方は全く違います。「外来の文字」と言う新しいものを、当時、既に存在していた日本古来の大和言葉の中に取り入れて、いわば道具として利用している、と言うことが出来ます。考えてみると、漢字は取り入れているけれど、読み方も発音もまるで違うし、仮名を發明しているのも、外来の文字をこちらの都合の良いように変化させて取り入れている、ということなのでしょう。漢詩に返り点を付けながら読むなんて無理なことをしているのも、外来の文化を日本古来の文明の中に取り込もうとする努力の表れではないだろうか。何だか新しい発見をしたような気になりました。日本古来の文明の中に外来の文明を取り入れる手法は他にもあつて、中国の律令制度を取り入れたのも、形は同じだけれど、中国が法の力で押さえつけようとする法治主義を前面に出しているのに対して、日本では日本古来の道徳を基に国を治めてゆくような形の制度に変形して受け入れている。儒教

の伝わり方にしても同じことが言える、と言つのです。

どうやら徹底した中国嫌いという事も根底にあるようで、中国の風下に置かれる筋合いはない、という主張も強烈です。菅原道真が遣唐使を廃止したのは賢明な判断だった、とか、『秀吉の朝鮮出兵は自身中国に乗り込んで当時ヨーロッパの世界を牛耳っていたスペインに対抗してアジアの世界の中心になろうとした。いわば中国を中心とする中華世界を否定したものだ。家康はこの考えを継承したので、北京政府とは正式な外交関係を結ばなかった』と言つ記述も見られます。中国には漢民族としての歴史の連続性は無い。北から攻め入ったスキタイやモンゴルなどの遊牧民族に完全に支配され、取つて代わられている。世界史を作つたのはモンゴル人だ、と言つのです。中国の文化を有難がつて信奉する必要は全くない、と言わんばかりの口調です。

日本は世界に類例のない独自の文明を持つている。ユーラシア大陸の西端と東端に独自の文明が発生した。日本と西ヨーロッパはモンゴル人の支配や統治を免れた数少ない例外だと言います。以前読んだ「文明の生態史観」で梅棹忠夫が同じようなことを言つ

ていたのを思い出しました。日本を中国の文化圏の中に位置付けようとしたのは、戦後の歴史家がやったことだった、と言います。日本には神話の時代からの立派な歴史があるのに、戦後、軍国主義思想を完全に破壊しようとしたアメリカを中心とする占領軍の方針に則って、これを否定することを急ぐあまり、外国の文献の中にある記述をもって自分の国の歴史の幕開けにしてしまったのだ。そもそも、蔑称として使われている「倭国」「倭人」なんて呼び名を自分の国の歴史の始まりにするなんて、こんなバカな話があるか、と言うのです。大体、どこの国の歴史も、起源は多かれ少なかれ神話ではないのか。ヨーロッパの歴史にしたって最初はユダヤやギリシャやローマの神話だし、乱暴を言えば、聖書だって神話に近いのではないだろうか。

日本独自の歴史を否定した歴史観を作ろうとする目論見は、アメリカの人種差別の思想と白色人種の有色人種に対する蔑視の姿勢の流れを汲むものだ、と言います。日露戦争の当時は、アメリカは日本の側に立って調停の役を勤めてくれましたが、日本があまりにも見事にロシアを負かしたのを見て、当時のセオドア・ルーズベルト大統領が有色

人種への危機感を感じて、突然日本を仮想敵国と見なし始めたと言われます。この思想が脈々と続いて、カリフォルニアでの日本人排斥運動に至り、第二次大戦へと繋がったものです。戦前、戦後を通じて日本の側でこの思想の片棒を担いだのが、所謂進歩的文化人と言われる人たちとされていますが、その原型は新渡戸稲造や吉野作造だ、と言います。新渡戸稲造なんて「日本人排斥の原因は日本人自身にある。自己反省すべきだ」と言う自虐的発想を始めた人で、自らを民衆より一段高いところにおき、欧米の文明に膝を屈する分だけ民衆を見下ろす姿勢で先導者として振舞った人。紙幣の肖像画などには値しない人物だ、なんて言っている辺りは相当過激です。この程、五千円札の肖像から新渡戸稲造を降ろすことになったのは偶然の一致かも知れませんが、面白いと思いませんでした。

こうした歴史を作り上げてきたのは、戦後、アメリカを中心とする占領軍の巧妙で粘り強い洗脳政策だったと言います。戦争終結後、日本人は戦勝国から、この戦争の責任は全面的に日本にある、と言う思想を強烈に吹き込まれました。計画的に「日本国民に

罪過の観念を植え付ける」戦略が実行されました。進歩的文化人、教養主義的知識人と言われる人たちが現れ、日本人を無意志、無気力、無定見なものにし、自分と言うものがない自民党政治を生み出し、更には懺悔外交に現を抜かず政権が続いたことで、戦勝国の戦略を成功させてしまった。日本はこの戦後の戦争に負けて、本当に「敗戦」したのだ、と言つのが著者の見方です。敗戦国が一方的に悪者だ、と断ぜられることはない。日本人が悪いことをした、とまず考えるべきではない。歴史の必然として起こった過去の出来事に対して、罪の意識を抱く必要は全くない。謝罪の必要もない。韓国や中国の不条理な嘘に対しては、国を挙げて抗議する時期が来ている、と言う主張は、全くその通りだと思います。

私は以前、本誌で「扶桑社の歴史教科書は中国や韓国に対しては全く問題があるとは思えない。あるとすれば、むしろアメリカに対してではないか」と感じたことを書いていますが、この本を読んで、著者の意図するところが判つて来ると、私の感想が間違っていないかと言つ自信を深めました。繰り返し書いてるように、私も昨今の日本の

懺悔外交の姿勢を残念に思っている一人です。西尾史観は下手をすると皇国史観、国粹主義の主張に繋がる恐れがありますが、今の世の中にはこうした主張も必要なのではないかと。私もどうやらこの主張に組する右翼の一人とも言えそうです。

(平成十五年二月五日)